
寄 居 町

むじな塚遺跡

スクーデリアハウス株式会社共同住宅建設関係埋蔵文化財発掘調査報告

2009

スクーデリアハウス株式会社
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 遺跡遠景（北より）



2 第5号集石土壇掘出土状況（南より）

むじな塚遺跡の紹介

むじな塚遺跡は、東武東上線男衾駅の西約1.2kmに位置し、荒川によって形成された標高115～116mの河岸段丘上に立地します。遺跡の北側には荒川が東流し、その荒川に注ぐ小河川によって遺跡の東西を画されています。今回、スクーデリアハウス株式会社の共同住宅建設に先立って発掘調査が行われました。

発掘調査では、縄文時代中期の竪穴住居跡6軒と集石土壇5基、掘立柱建物跡2棟、土壇19基、近世の溝跡などの多数の遺構が見つかりました。竪穴住居に囲まれた集落の中央部で発見された集石土壇には、真っ赤に変色した大きな礫が設置されており、繰り返し使用された跡が確認できました。

序

埼玉県さいたましの北西部に位置する寄居町は、秩父地方への玄関口として、古えから栄えてまいりました。現在も都心から70km圏に位置し、関越自動車道、一般国道140号や254号が通り、鉄道もJR八高線、東武東上線、秩父鉄道などが結接する交通の要衝地です。

また、町域は山地、丘陵、台地、低地と様々な地形に恵まれており、四季折々の景色が変化に富む緑豊かな地域です。荒川の造形による名勝玉淀は県の指定を受け、「風布川ふうふがわ・日本水やまとみづ」は、日本の名水百選に数えられております。このような豊かな自然を背景に、太古から人々の生活が営まれてきた寄居町は、遺跡も数多く残されており、考古学的にも非常に重要な地域です。また鉢形城や花園城をはじめとする中世城郭が点在することでも知られております。

このように自然と歴史に恵まれた寄居町ですが、宅地開発や商業施設の開発事業が相次いでおります。このたび富田地区にスクーデリアハウス株式会社によって共同住宅の建設が計画されました。建設予定地にむじな塚遺跡が存在することから、それらの埋蔵文化財の取り扱いについて、関係諸機関が慎重な協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の処置を講ずることとなりました。発掘調査は、スクーデリアハウス株式会社の委託を受けて当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、縄文時代中期の竪穴住居跡や集石土壌、掘立柱建物跡が見つかりました。これらの遺構からは縄文土器や石器が出土し、当地域の歴史を考える上で貴重な発見となりました。

本書は、これら発掘調査の成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護、普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として広く御活用いただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力いただきましたスクーデリアハウス株式会社、寄居町教育委員会並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成21年9月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 刈部博

例 言

1. 本書は、埼玉県大里郡寄居町に所在するむじな塚遺跡の発掘調査報告書である。

2. 遺跡の略号と代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

むじな塚遺跡 (MJNTK)

大里郡寄居町大字富田字西原3536番地他

平成20年7月29日付け 教生文第2-30号

3. 発掘調査は、スクーデリアハウス株式会社共同住宅建設事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育委員会及び寄居町教育委員会が調整し、スクーデリアハウス株式会社の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。また、整理報告書作成事業も同社から委託を受け、当事業団が実施した。

4. 事業の委託業務名は、下記のとおりである。「スクーデリアハウス株式会社の共同住宅建設事業予定地に係る埋蔵文化財発掘調査（整理含む）」

5. 発掘調査・整理報告書作成事業は、I-3の組織により実施した。

発掘調査は、平成20年7月14日～10月31日まで磯崎 一・細田 勝が担当して実施した。

整理報告書作成事業は、平成21年4月8日から平成21年6月30日まで松本美佐子が担当して実施し、同年9月に事業団報告書第364集として印刷・刊行した。

6. 発掘調査における基準点測量は、中央航業株式会社へ委託した。また、空中写真撮影は、株式会社東京航業研究所へ委託した。

7. 発掘調査における写真撮影は磯崎・細田が行い、出土品の写真撮影は松本が行った。

8. 出土品の整理・図版作成は松本が行い、鈴木孝之・上野真由美の協力を受けた。

9. 本書の執筆は、I-1を寄居町教育委員会生涯学習課・埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、IV-2を鈴木、その他を松本が行った。

10. 本書の編集は、松本が行った。

11. 本書に掲載した資料は、平成22年4月以降寄居町教育委員会が管理・保管する。

12. 発掘調査、本書の作成にあたり、下記の機関・方々からご教示・ご協力を賜った。記して感謝いたします（敬称略）。

寄居町教育委員会（金子眞土・今関久夫・石塚三夫・小林 高・宮下響子・澤口和正）

凡 例

1. 本書におけるX・Yの数値は、世界測地系(新測地系)による国土標準平面直角座標第IX系(原点北緯36° 00′ 00″、東経139° 50′ 00″)に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位は、すべて座標北を示す。

今回の調査でベンチマークとしたK-4グリッド北西杭の座標は、X=12240.000m、Y=-55150.000m(北緯36° 06′ 31.5183″、東経139° 13′ 14.7658″)で、杭上の標高は116.370m。

2. 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10m×10mの範囲を基本(1グリッド)としている。
3. グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット(A・B・C…)、西から東方向に数字(1・2・3…)を付し、両者を組み合わせて呼称した。
4. 本書の本文、挿図、表中に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

S J…竪穴住居跡
S C…集石土壇
S B…掘立柱建物跡
S D…溝跡
S K…土壇

5. 本書では、発掘調査時点で命名した遺構の呼称を以下のとおり一部変更している。

《新》	《旧》
第1号住居跡(S J1)	S J3
第2号住居跡(S J2)	S J7

第1号集石土壇(S C1)	S C1-1
第2号集石土壇(S C2)	S C1-2, 1-3
第3号集石土壇(S C3)	S C2
第4号集石土壇(S C4)	S C3
第5号集石土壇(S C5)	S C4, S J1
第19号土壇(S K19)	S J1Pit1

6. 本書における挿図の縮尺は、原則として以下のとおりであるが、一部例外もある。縮率は、個々の図面に記した。

遺構	グリッド配置図	1/500
	全体図	1/300
	遺構図	1/60
遺物	縄文時代	土器(拓影図) 1/3
		# (実測図) 1/4
		石器 2/3・1/3
	近世	1/3

7. 遺物の残存率は、図示した部分についての凡その残存率を5%刻みで示した。
8. 遺物の焼成については、数値での表現が難しいため、良好・普通・不良の3段階で表す。
9. 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高を示す。
10. 本書に使用した地図は、国土地理院発行1/25,000地形図及び寄居町都市計画図(1/2,500・1/10,000)である。
11. 文中の引用文献等は、(著者 発行年)の順で表現し、その他の参考文献とともに巻末に一覧を掲載した。

目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過 …………… 1
2. 発掘調査、報告書作成の経過 …………… 2
3. 発掘調査、報告書作成の組織 …………… 2

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境 …………… 3
2. 歴史的環境 …………… 4

III 遺跡の概要 …………… 9

IV 遺構と遺物

1. 縄文時代 …………… 15
 - (1) 住居跡 …………… 15

(2) 集石土壇 …………… 26

(3) 掘立柱建物跡 …………… 35

(4) 土壇 …………… 37

(5) グリッド出土遺物 …………… 48

2. 近世 …………… 62

(1) 溝跡 …………… 62

(2) グリッド出土遺物 …………… 62

V 調査のまとめ …………… 64

写真図版

抄録

挿 図 目 次

第1図	埼玉の地形	3	第28図	第5号集石土壇	33
第2図	周辺の遺跡	5	第29図	第5号集石土壇出土遺物	34
第3図	遺跡位置図	10	第30図	第1号掘立柱建物跡	35
第4図	調査区グリッド配置図	12	第31図	第2号掘立柱建物跡	36
第5図	基本土層	13	第32図	第2号掘立柱建物跡出土遺物	37
第6図	調査区全体図	14	第33図	土壇(1)	39
第7図	第1号住居跡	16	第34図	土壇(2)	40
第8図	第1号住居跡出土遺物(1)	17	第35図	第6号土壇遺物出土状況	41
第9図	第1号住居跡出土遺物(2)	18	第36図	土壇出土遺物(1)	42
第10図	第2号住居跡	19	第37図	土壇出土遺物(2)	43
第11図	第2号住居跡出土遺物	20	第38図	土壇出土遺物(3)	44
第12図	第3号住居跡	21	第39図	土壇出土遺物(4)	45
第13図	第4号住居跡	22	第40図	土壇出土遺物(5)	46
第14図	第4号住居跡出土遺物	23	第41図	土壇出土遺物(6)	47
第15図	第5号住居跡	24	第42図	グリッド出土遺物(1)	48
第16図	第5号住居跡出土遺物	24	第43図	グリッド出土遺物(2)	49
第17図	第6号住居跡	26	第44図	グリッド出土遺物(3)	50
第18図	第6号住居跡出土遺物	26	第45図	グリッド出土遺物(4)	51
第19図	第1号集石土壇出土遺物(1)	27	第46図	グリッド出土遺物(5)	53
第20図	第1号集石土壇	27	第47図	グリッド出土遺物(6)	54
第21図	第1号集石土壇出土遺物(2)	28	第48図	グリッド出土遺物(7)	55
第22図	第2号集石土壇	29	第49図	グリッド出土遺物(8)	56
第23図	第3号集石土壇	30	第50図	グリッド出土遺物(9)	57
第24図	第3号集石土壇出土遺物	30	第51図	第1・2号溝跡	61
第25図	第4号集石土壇	31	第52図	近世の出土遺物	62
第26図	第4号集石土壇出土遺物(1)	31	第53図	第10次調査区周辺遺構配置図	65
第27図	第4号集石土壇出土遺物(2)	32	第54図	埼玉県北西部の集石土壇	66

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧表	4	第7表	第6号住居跡柱穴計測表	26
第2表	第1号住居跡柱穴計測表	17	第8表	第1号掘立柱建物跡柱穴計測表	35
第3表	第2号住居跡柱穴計測表	19	第9表	第2号掘立柱建物跡柱穴計測表	37
第4表	第3号住居跡柱穴計測表	21	第10表	土城計測表	41
第5表	第4号住居跡柱穴計測表	23	第11表	石器一覧表	59
第6表	第5号住居跡柱穴計測表	25	第12表	近世の遺物観察表	63

写真図版目次

図版1	1 遺跡遠景(空中写真・南より)(1)	図版9	1 第5号集石土城半截状況
	2 遺跡遠景(空中写真・南より)(2)	2	第5号集石土城完掘状況
図版2	1 第1号住居跡完掘状況	3	第5号集石土城掘り方
	2 第1号住居跡炉跡遺物出土状況	図版10	1 第1号土城遺物出土状況
	3 第2号住居跡完掘状況	2	第1号土城完掘状況
図版3	1 第2号住居跡炉体土器出土状況	3	第2号土城遺物出土状況
	2 第3号住居跡完掘状況	4	第3号土城完掘状況
	3 第4号住居跡完掘状況	5	第4号土城完掘状況
図版4	1 第5号住居跡完掘状況	6	第5号土城完掘状況
	2 第5号住居跡炉体土器出土状況	7	第6号土城遺物出土状況
	3 第6号住居跡完掘状況	8	第7号土城完掘状況
図版5	1 第1～4号集石土城検出状況	図版11	1 第8号土城完掘状況
	2 第1号集石土城検出状況	2	第9・10・11号土城完掘状況
	3 第1号集石土城半截状況	3	第12号土城遺物出土状況
図版6	1 第1号集石土城完掘状況	4	第13号土城遺物出土状況
	2 第2号集石土城検出状況	5	第14号土城完掘状況
	3 第2号集石土城完掘状況	6	第16号土城遺物出土状況
図版7	1 第2号集石土城掘り方	7	第17・18号土城完掘状況
	2 第3号集石土城検出状況	8	第19号土城完掘状況
	3 第3号集石土城完掘状況	図版12	1 第1号掘立柱建物跡完掘状況
図版8	1 第4号集石土城完掘状況	2	第2号掘立柱建物跡完掘状況
	2 第4号集石土城掘り方	3	第1・2号溝跡完掘状況
	3 第5号集石土城検出状況	図版13	1 第6号土城出土遺物(37図4)

- | | | | | |
|------|---|------------------|------|---------------|
| 図版13 | 2 | 第6号土城出土遺物(37図5) | 2 | 土城出土遺物(1) |
| | 3 | 第6号土城出土遺物(37図6) | 図版18 | 1 土城出土遺物(2) |
| | 4 | 第6号土城出土遺物(37図7) | | 2 土城出土遺物(3) |
| | 5 | 第6号土城出土遺物(37図8) | 図版19 | 1 土城出土遺物(4) |
| | 6 | グリッド出土遺物(42図1) | | 2 グリッド出土遺物(1) |
| 図版14 | 1 | 第1号住居跡出土遺物(1) | 図版20 | 1 グリッド出土遺物(2) |
| | 2 | 第1号住居跡出土遺物(2) | | 2 グリッド出土遺物(3) |
| 図版15 | 1 | 第2号住居跡出土遺物 | 図版21 | 1 グリッド出土遺物(4) |
| | 2 | 第4号住居跡出土遺物 | | 2 グリッド出土遺物(5) |
| 図版16 | 1 | 第5・6号住居跡出土遺物 | 図版22 | 1 グリッド出土遺物(6) |
| | 2 | 第1～5号集石土城出土遺物(1) | | 2 近世の遺物 |
| 図版17 | 1 | 第1～5号集石土城出土遺物(2) | | |

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県教育委員会では、民間開発事業によりその保存に影響が及ぶ埋蔵文化財を適切に保護するため、県内市町村教育委員会に対し、専門職員の配置や発掘調査体制の整備などを積極的に指導してきた。しかしながら、大規模又は突発的な開発事業に係り、緊急に埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査の実施が必要となり、地元教育委員会がこれに即応することが困難な場合については、当該市町村教育委員会からの要請に基づき、県教育委員会として支援を行ってきたところである。

平成19年5月、エム・ケー株式会社から寄居町教育委員会に、寄居町大字富田地内において、4,000㎡を越える面積で、抜根作業及び土地造成事業の計画を立て、文化財の取り扱いについての相談があった。

町教育委員会では、事業計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地（むじな塚遺跡）に該当しており、抜根作業により遺跡が破壊される恐れがあったため、県教育委員会とも調整を図り、事業者に対し、埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて照会するように指導した。

平成19年7月2日、事業者から確認調査の申請を受け、事業計画地の伐採が終了し次第、確認調査を実施することとなった。確認調査は8月1日から実施し、調査の結果、縄文時代中期の堅穴式住居跡・土坑・集石及び土器・石器を確認した。

確認調査の結果をもとに、申請地内において、2箇所の地点（約2,000㎡）で発掘調査が必要である旨、エム・ケー株式会社宛に回答した。

また、今回の確認調査により、むじな塚遺跡が南西部に広がったため、県教育委員会あて、遺跡の変更増補の手続きを行った。

その後、事業者及び事業内容について変更があり、平成20年2月27日付けで、スクーデリアハ

ウス株式会社から、店舗付共同住宅建設に伴い、文化財保護法第93条の規定による埋蔵文化財発掘の届出が提出され、県教育委員会教育長は平成20年3月13日付け教生文第3-1067号で、発掘調査の指示を行った。

その結果を受けて、スクーデリアハウス株式会社から、町教育委員会あてに発掘調査の依頼があったが、現状の職員体制では、数ヶ月に及ぶ発掘調査事業に携わることが難しいため、平成20年6月5日付け寄生発第337号で県教育委員会宛に支援の要請をした。

そして、スクーデリアハウス株式会社を含む3者で協議が行われ、発掘調査は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施することとなり、平成20年6月25日付けで4者による「スクーデリアハウス株式会社の共同住宅建設事業予定地に係る埋蔵文化財の取扱いに関する協定書」が締結された。

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から県教育委員会あて、文化財保護法第92条の規定に基づく届けが提出された。これに対する県教育委員会からの指示通知は以下のとおりである。

むじな塚遺跡（62-040）

平成20年7月29日付け教生文第2-30号
（寄居町教育委員会生涯学習課・埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

むじな塚遺跡の発掘調査は、スクーデリアハウス株式会社との共同住宅建設に伴うもので、平成20年7月14日から平成20年10月31日まで実施した。調査面積は2,207㎡である。

7月上旬から事務手続き等の準備を開始し、7月24日から順次事務所設置工事・囲柵工事等を実施した。7月28日から並行して重機による表土除去作業を開始した。遺構実測作業のための基準点測量及びグリッド杭敷設作業は8月4、5日に実施した。なお、グリッドは10m方眼とし、調査区北西隅を基準に北から南にアルファベット（ABC）、西から東に数字（123）を付し、両者を組み合わせてB-1からM-6グリッドを設定した。

表土除去終了後、人力による遺構確認作業を行ったところ、堅穴住居跡6軒等が検出されたため、直ちに遺構の精査を開始し、土層断面図・平面図等の作成及び写真撮影等の記録作業を行った。

遺構の調査終了後、9月25日に航空機による空中写真撮影を実施した。

全ての記録作業を終了し、10月31日までに事務所の撤去、事務手続き等を行い、完了した。

(2) 整理・報告書の作成

むじな塚遺跡の整理作業は、平成21年4月8日から平成21年6月30日まで実施した。

作業はまず、出土遺物の水洗・注記作業を行い、その後、接合・復元作業を実施した。接合の終了した遺物は、実測機械（3スペース）で作成した下図をもとに実測図を完成させた。破片遺物は、採拓し、断面の実測を行った。実測図、断面図ともにトレースを行い、レイアウト後、遺物図版の版下を作成した。

遺構図面に関しては、平面図、断面図の整合性をとった上で第二原図を作成し、スキャナーでパソコンに取り込み、デジタルトレースを行った。パソコン上でレイアウトを行い、遺構図版の版下を作成した。また、抽出した遺物は写真撮影し、発掘調査時の遺構写真とともにパソコン内で編集を行い、写真図版を作成した。

6月上旬から割付作業と原稿執筆を進め、下旬には印刷業者を選定して入稿した。校正は3回を行い、平成21年9月に報告書を刊行した。また、図面類・写真類・遺物は整理、分類し、収納作業を行い、すべての作業を終了した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成20年度（発掘調査）

理 事 長	刈 部 博
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆
総務部	
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志
総 務 課 長	松 盛 孝

調査部

調 査 部 長	村 田 健 二
調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
調 査 第 二 課 長	細 田 勝

平成21年度（報告書作成）

理 事 長	刈 部 博
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆
総務部	
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志
総 務 課 長	田 中 雅 人

調査部

調 査 部 長	小 野 美 代 子
調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
整 理 第 一 課 長	宮 井 英 一
主 事	松 本 美 佐 子

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

むじな塚遺跡が所在する寄居町は、埼玉県西北部、奥秩父山地の甲武信ヶ岳に源を発する荒川が秩父山地から関東平野へ流れ出す部分に位置する。

寄居町の地形を概観すると、西から南側にかけて山地が発達し、それに続き丘陵が広がる。町域のほぼ中央を西から東へ貫流する荒川の両岸には台地や低地が形成されている。

山地・丘陵は、町北西部に上武山地、その北部に松久丘陵が広がり、西側から南側にかけては外秩父山地、その東側に比企丘陵が発達している。

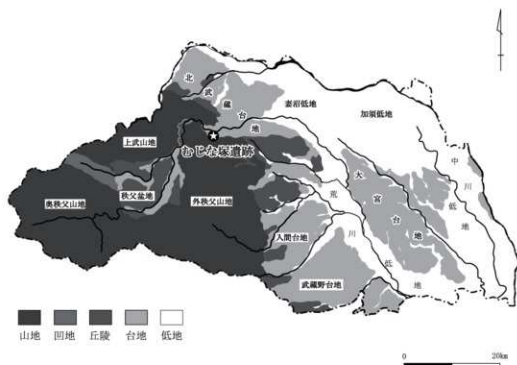
台地は、荒川によって形成された、波久礼を扇頂とする扇状地であり、両岸には河岸段丘が発達している。この台地は、右岸より左岸の方が規模が大きい。

右岸の台地は江南台地と呼ばれ、金尾・折原地区から富田、赤浜地区を経て、高度を下げながら熊谷市へ延びている。右岸は谷の発達が著しく、

荒川に注ぐ小規模河川によって形成された谷が複雑な地形を作り出している。本報告のむじな塚遺跡も荒川に注ぐ小河川に開析されたこの台地上の富田地区に立地する。

左岸に広がる台地は櫛引台地であり、寄居城北高校付近から用土地区を通り、深谷市へ至る。なお、町西部にあたる末野地区周辺の台地は、左岸に位置するが江南台地に比定されている。櫛引台地は、高位の櫛引面と中位の御稜威ヶ原面、低位の寄居面に分類される。低位段丘面である寄居面は関東ローム層に覆われない完新世段丘である。この寄居面は、さらに二分類することができ、寄居面の中で高位にあたる寄居面Ⅰと荒川至近に広がる低位の寄居面Ⅱに分けられている。台地上は比較的起伏が少なく谷の発達も顕著ではない。

低地は、荒川流路沿いに数カ所みられ、河床面と数m程度の比高差しかない場所ばかりである。



第1図 埼玉の地形

2. 歴史的環境

旧石器時代

寄居町における旧石器時代の遺跡は赤浜牛無具利遺跡や稲荷窪遺跡、末野遺跡があげられる。荒川右岸の赤浜牛無具利遺跡や稲荷窪遺跡からは、ナイフ形石器、槌器などが出土しており、特に赤浜牛無具利遺跡では、石器集中地点に加えて炭化物の集中地点が報告されている。また、同じ江南台地上で、荒川左岸に位置する末野遺跡（C～F区）では局部磨製石斧、ナイフ形石器、縦長剥片等が出土しており、県内でも最古級の遺物が出土している。

縄文時代

寄居町では、草創期に該当する遺跡は現在までのところ発見されていない。

早期前半は、僅かに松久丘陵先端に位置している掘込遺跡などで遺物が散見されるに過ぎないが、早期後半になると、上の原遺跡（17）、愛宕山北遺跡（21）、ゴシン遺跡（29）、銭小田遺跡（34）など、各地で遺物が発見されるようになる。しかし本格的な集落の展開は前期を待つこととなる。

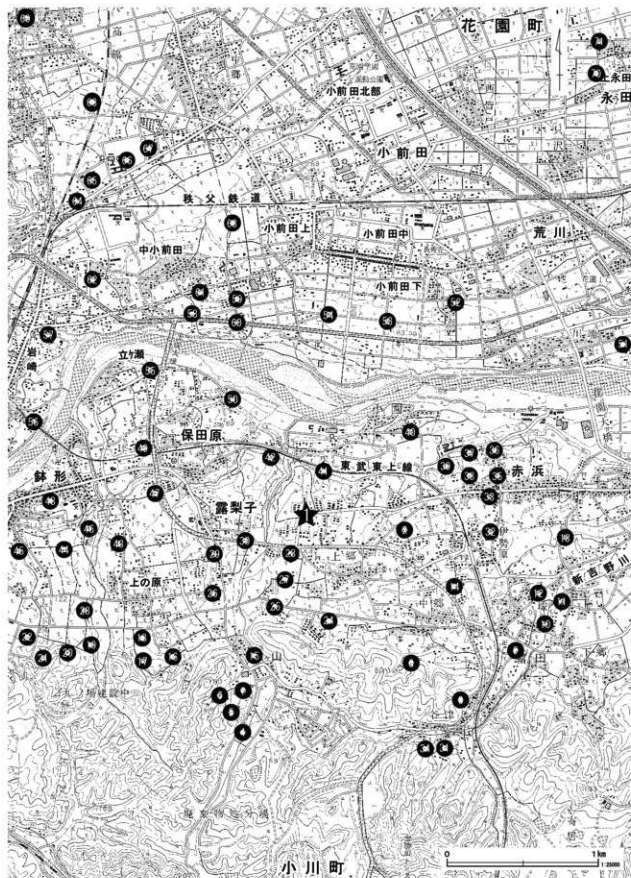
前期の遺跡としては、むじな塚遺跡（1）、東原

遺跡（2）、下南原遺跡、前耕地遺跡、上郷西遺跡（28）、羽毛田遺跡（50）、南大塚遺跡、薬師台遺跡（44）、甘粕原遺跡（47）、樋ノ下遺跡（56）、中小前田1遺跡（59）、塚屋遺跡（60）などがあげられる。前耕地遺跡は、花積下層式土器を出土した前期前半段階の遺跡である。この時期までは早期に引き続き遺跡数は少ないが、この後の関山～黒浜式期に至って遺跡数の増加が顕著に認められ、関山～黒浜式期の住居跡が70軒あまり検出された南大塚遺跡のような大規模な集落跡も確認されるようになる。むじな塚遺跡でも黒浜～諸磯期の住居跡が16軒検出された。むじな塚遺跡の東に小河川を挟んで隣接する東原遺跡からも、黒浜～諸磯a式期の住居跡が18軒検出されており、両遺跡は小河川を挟むとはいえ、当該期の一連の集落と考えられる。また、関山式期の遺跡である羽毛田遺跡のように、低位段丘である寄居面にも集落遺跡が出現する。

続く諸磯式期においても諸磯a～b式の段階では集落の大規模化が継続するようである。この時期の遺跡としては、25軒の住居跡が調査された塚

第1表 周辺の遺跡一覧表

1	むじな塚遺跡	19	愛宕山東遺跡	37	上寺西遺跡	55	立ヶ瀬古墳群
2	東原遺跡	20	入田1遺跡	38	昌国寺遺跡	56	樋ノ下遺跡
3	富田堀の内	21	愛宕山北遺跡	39	常楽寺南遺跡	57	岩崎遺跡
4	西岸谷遺跡	22	入田2遺跡	40	小園古墳群	58	北塚屋遺跡
5	西岸谷二遺跡	23	八幡台遺跡	41	上郷古墳群	59	中小前田1遺跡
6	粕沢2遺跡	24	大谷久保遺跡	42	日向山遺跡	60	塚屋遺跡
7	粕沢1遺跡	25	上の前遺跡	43	鉢形東遺跡	61	中小前田2遺跡
8	根岸入沼窪跡	26	大塚遺跡	44	薬師台遺跡	62	板沢堀の内
9	不動寺遺跡	27	上郷A遺跡	45	氷川台遺跡	63	板沢窪跡
10	島田氏屋敷跡	28	上郷西遺跡	46	東遺跡	64	板沢小西遺跡
11	塚越遺跡	29	ゴシン遺跡	47	甘粕原遺跡	65	板沢上の原遺跡
12	東伴場地遺跡	30	霧梨子遺跡	48	大河内金兵衛陣屋跡	66	板沢古墳群
13	宮の前遺跡	31	伝田不動寺跡	49	町田跡地遺跡	67	大塚山遺跡
14	中芝遺跡	32	伊勢原遺跡	50	羽毛田遺跡	68	南飯塚遺跡
15	旧鉢形中跡遺跡	33	南側上町2遺跡	51	黒田古墳群	69	飯塚氏館
16	平林遺跡	34	銭小田遺跡	52	小前田氏館	70	東大塚遺跡
17	上の原遺跡	35	伊勢原古墳群	53	小前田古墳群	71	東大塚古墳群
18	平林2遺跡	36	北側上町遺跡	54	桶屋遺跡		



第2図 周辺の遺跡

屋遺跡がある。諸磯c式期に入ると、樋ノ下遺跡、上郷西遺跡などで住居跡が検出されているものの、規模は収束の傾向にあり、再び拡大が認められるのは中期に入ってからのものである。

中期になると遺跡数は爆発的な増加をみせる。特に加曾利E式期でその傾向が顕著であり、前段階の勝坂式期の集落と比較しても格段に増加していることがわかる。この遺跡の増加と大規模化の傾向は、中期後半から次第に衰退し、後期の堀ノ内式期以降、極端に遺跡は減少するようである。

遺跡としては、むじな塚遺跡、八幡台遺跡(23)、ゴシン遺跡、露梨子遺跡(30)、水川台遺跡(45)、甘粕原遺跡、北塚屋遺跡(58)、中小前田2遺跡(61)など多数の遺跡があげられる。むじな塚遺跡が展開する中期前半の勝坂式期は、後半の加曾利E式期と比較するとまだ集落増加はそれ程認められず、甘粕原遺跡や北塚屋遺跡などで確認されているのみである。中期の集落は山地縁辺部から台地部に至る各所に展開していたようであるが、むじな塚遺跡や露梨子遺跡などの大規模な集落跡は舌状台地が発達した場所に位置する傾向がみられる。大規模な集落が展開する一方で、比較的小規模な集落も各地域に認められる。

後期になると、堀ノ内式期に該当する集落が散見されるが中期ほどの勢いはなく、この時期を境にして、遺跡の存在そのものが稀薄となってしまふ。後期の遺跡は、中小前田遺跡、樋ノ下遺跡、愛宕山北遺跡、大塚遺跡(26)、町田耕地遺跡(49)、東遺跡(46)などがあげられる。

このうち、樋ノ下遺跡からは柄鏡形の敷石住居を含む13軒の住居跡が検出されており、該期の集落跡としては比較的大きな集落といえる。また、樋ノ下遺跡をはじめ、東遺跡や露梨子遺跡でも敷石住居が検出されており、他の地域に比べると検出例が多いことが特色としてあげられる。荒川の中流域にあたるこの地域において、敷石として使う石材に恵まれていたことも要因の一つであろう。

後期中葉からは著しく遺跡の数は減少し、後期後半段階では樋ノ下遺跡で曾谷式土器を出土した土壌が確認されている程度である。晩期の遺跡については現時点で発見の報告はない。このような状態は、弥生時代中期に松久丘陵先端に成立する用土・平遺跡が出現するまで続く。

弥生時代

用土・平遺跡からは、中期の住居跡10軒と倉庫遺構2棟が検出されており、中部高地系土器と磨製石鏃、有角石斧などの石器が出土している。弥生時代の遺跡はこの周辺でみられる程度である。

古墳時代

古墳時代になると、長期にわたって閑散としていた荒川右岸の地域で再び人々が活発に活動し始める。また、未開発地が多かった寄居面への進出が積極的に始まる。

前期の集落跡は荒川右岸の富田地区や赤浜地区で集中して発見されており、現在までのところ町西部では確認されていない。むじな塚遺跡、東遺跡、東伴場地遺跡(12)、中芝遺跡(14)、伊勢原遺跡(32)、上寺西遺跡(37)、鉢形東遺跡(43)などが分布し、東伴場地遺跡、中芝遺跡、上寺西遺跡は五領式期から和泉式期まで継続する集落であることが確認されている。

また、伊勢原遺跡からは吉ヶ谷式土器をもつ住居跡に加え、16軒の住居跡が検出されている。伊勢原遺跡で出土した土器群は概ね南関東系の土器で構成されているが、やや西に位置する鉢形東遺跡からはS字状口縁台付甕も出土している。

一方、左岸では引き続き用土地区に遺跡が分布しており、藤田南遺跡などは五領式期から和泉式期にかけての集落として知られている。

古墳は荒川の両岸に多数確認されるが、古墳時代後期以降に築造されたもので、前期にまで遡るものは確認されていない。

後期になると、荒川左岸では小前田古墳群(53)、桜沢古墳群(66)、藤田古墳群、木ノ根沢

古墳群、壁ヶ谷戸古墳群、右岸では上郷古墳群(41)、赤浜古墳群、伊勢原古墳群(35)などが形成される。これらの古墳群は、小型の円墳によって構成されており、築造時期は6世紀前半から7世紀と考えられている。

集落跡は東伴場地遺跡や露梨子遺跡、むじな塚遺跡など、前段階からの遺跡立地を踏襲しながらも末野地区の城見上遺跡や末野遺跡など、これまで未開発であった地域への居住が始まる。特に、6世紀末から7世紀前半頃には末野地区で須恵器の生産が始まり、人々が山麓に進出していく要因の一つになったことは想像に難くない。

奈良・平安時代

古墳の築造が終わりを迎える頃になると、鐘撞堂山の尾根上に馬騎の内廂寺が建立される。礎石立ちの建物跡を含む16ヶ所もの平場の存在が知られており、出土瓦には須恵器製作の技術である平行叩き具痕、当て具痕がみられる。そのため、古くから末野窯跡の操業と直接関係する寺院として須恵器工人との関係が指摘されている。前出の末野窯跡は大規模な窯跡群へと成長し、8世紀後半から9世紀代に操業のピークを迎える。分布も山麓から平地部分に進出し、10世紀には桜沢窯跡(63)や折原窯跡、隣の長瀬町など各地に分散する傾向が見受けられる。

寄居町は古代の行政区分において、荒川の左岸が樺沢郡、右岸が男衾郡に属していたと考えられており、それでいくと末野窯跡群や馬騎の内廂寺は、樺沢郡に属していたことになる。樺沢郡では、すでに深谷市(旧岡部町)の中宿遺跡で正倉跡が発見されており、至近距離には郡家の寺院とも考えられる岡廂寺も位置している。

一方、右岸の男衾郡は、男衾の地名が残る東伴場地遺跡周辺に郡家の存在が推定されているが、現在までのところ関連施設も含めて発見されていない。しかし、東伴場地遺跡からは、基壇状遺構とともに瓦が出土しており、寺院が存在していた

可能性が高いと思われる。

奈良・平安時代の遺跡は、先にあげた古墳時代後期の集落が継続する傾向が強い。新しく形成される遺跡は、平安時代に入ってから形成された小規模な集落跡が多く、折原石道遺跡、南大塚遺跡、氷川台遺跡、前耕地遺跡、愛宕山東遺跡(19)などがあげられる。

中・近世

平安時代後期になると、荘園を経済基盤とした武装集団が成長し、やがて武士団を形成するようになる。武蔵国を拠点とした武蔵武士は、後の石橋山における源頼朝の挙兵に従い、鎌倉幕府の成立に大きな役割を果たしていくのである。ここで活躍したのが、秩父氏の末裔である畠山氏・河越氏のような豪族的領主や武蔵七党と呼ばれる同属的結合関係で結ばれた小中規模の武士団である。

さて、寄居町域には畠山氏のような豪族的領主の存在は確認できないが、武蔵七党の猪俣党に属する尾園・男衾・藤田・山崎・桜沢・南飯塚・无動寺・金尾氏や丹党に属した織原・栗葉氏などが町内の各地に割拠していたようである。

彼らは自らの本貫地名を名乗り、桜沢・藤田・男衾・折原(織原)・波久礼(栗葉)など、現在も地名が残っている地区も多い。拠点には堀や土塁などの防御施設を備えた館を構えており、各地区に館跡の推定地が存在する。いずれも不確定ながら、藤田氏館跡、桜沢氏の桜沢堀の内(62)、男衾氏の富田堀の内(3)、无動寺氏の无動寺遺跡(9)などがあり、桜沢堀の内には土塁と堀の一部が残されている。また、隣接する深谷市(旧花園町)には、こちらも推定地であるが小前田氏館(52)、飯塚氏館(69)が存在している。

富田地区は、男衾氏または无動寺氏が領有していたと考えられ、周辺には、「富田形頂部」と呼ばれる特徴的な技法をもつ初期板碑が点在している。特に、大日堂と呼称される堂に安置されている板碑は、寛元元年(1243)の銘が刻まれる町内最古

の板碑で、県内でも類例がない胎藏界曼荼羅の中台八葉院を表している。現不動寺境内にも康元2年(1257)の記念銘をもつ阿弥陀一尊種子が刻まれた板碑が存在している。これらの板碑は、富田周辺の限られた範囲で4例が確認されるだけである。造立者は、男衾氏もしくは無動寺氏の存在が窺われるところであり、武士団の勢力範囲を探るための貴重な資料でもある。このように、平安後期から鎌倉時代にかけての当地域は、遺跡として痕跡を捉えられるところは多くないものの、中小規模の武士団を主役として活発な動きがあった。

赤浜地区には鎌倉街道土道が通っていたと伝わっており、実際に赤浜天神沢遺跡や普光寺東遺跡からは、鎌倉街道土道跡と推定される掘削状遺構や塚及び塚盛土の下から土壇等が調査されている。13世紀後半から15世紀前半の遺物が出土しており、普光寺付近からは50基以上の板碑群が出土したことで知られている。

さらに塚田周辺は、室町時代には「塚田千軒」とも呼ばれる宿が栄えていた。同地区の三嶋神社に伝わる応永2年(1395)銘の鰐口に「塚田宿」の銘がみられる。また、千葉県鴨川市(旧安房郡天津小湊町)の清澄寺にある明徳3年(1392)銘の梵鐘には「大工武州塚田 道禅」とあり、鋳物師集団の存在を示す貴重な資料として注目される。塚田鋳物師の詳細については不明であるが、三嶋神社境内から鉄滓や炉壁が採集され、この地が「塚田鋳物師」の本拠地＝鋳造遺跡である可能性が高い。

さて、元弘の乱(1331)を経て、室町幕府が成立すると、貞和5年(1349)足利尊氏は次男の基氏を鎌倉公方として派遣した。その後、上杉禅秀の乱を契機として永享の乱(1438)が勃発すると、足利成氏が古河に移り、古河公方と呼ばれるようになる。古河公方と両上杉氏は、五十子の戦いなどで争ったが、関東管領補佐役である執事の職をめぐって山内上杉家の長尾景春は文明8年

(1476)反旗を翻し鉢形城に入る。この時期に長尾景春は鉢形城の整備を行い、その礎を築くのである。鉢形城は、既に存在していたが本格的な城郭として整備されたのはこの頃と考えられている。

文明10年(1478)、景春は扇谷上杉氏に従っていた名将太田道灌によって鉢形城を追放され、山内上杉顕定が入城する。両上杉氏の争いが激化してくると、それに乗じて相模を制圧した北条氏が武蔵国に進出し始める。大永4年(1524)の高輪原の戦い、天文6年(1537)の三ツ木原の戦いに勝利し、江戸城と河越城を奪取した北条氏は、河越夜戦を経て、秩父盆地まで勢力を広げるのである。

ところで、室町時代から戦国期にかけての寄居町は猪俣党藤田氏の末裔が依然勢力を誇っていた。当初は扇谷上杉氏に従っていたが、北条氏による支配が進むと藤田康邦は北条氏康の四男である氏邦を養子に迎える。越後の長尾景虎、甲斐の武田晴信といった戦国の群雄の動きに対し、氏邦は天神山城から鉢形城に移り、支城とされる日尾城・高松城・要害山城・花園城・土土城・円良田城などの本格的な整備を進めたと考えられている。

要害山城は、三つ廓の4つの平場が調査されており、武田氏の進入に備えた「早期警戒型物見台」としての機能を想定する見解もある。花園城については未調査であるため詳細は不明である。折原堀の内遺跡、末野元宿遺跡、大正寺遺跡などでは中世の集落跡が確認されており、北条氏に仕えた武士が居住していた可能性も考えられる。

天正17年(1589)真田家の名胡桃城を猪俣邦憲が奪取するという名胡桃事件の発生を期に情勢は一変し、豊臣秀吉による小田原攻めが始まる。鉢形城は前田利家らに包囲され籠城戦を展開するが、氏邦は開城を決断することになる。北条家の本拠地であった小田原城も落ち、四代に亘り関東に君臨した北条氏もついに滅亡し、鉢形城を含め、各支城は徳川家康によってすべて廃城とされた。

Ⅲ 遺跡の概要

むじな塚遺跡は、大里郡寄居町大字富田に所在し、東武東上線男会駅の西方約1.2kmに位置する。荒川を望む、右岸の江南台地北北部のこの地域は、荒川に注ぐ小河川の開析が進み、谷地形が発達している。むじな塚遺跡は、東側を吉野川、西側を塩沢川の開析谷によって画され、北東方向に張り出した舌状台地上に展開している。東側は緩やかな傾斜を保ちながら台地上部へと続き、台地上は起伏が少なく平坦な地形を呈する。遺跡の西側は、東側とは対称的に塩沢川の谷が切り立ち、急激に落ち込んでいる。

第3図にむじな塚遺跡の範囲を図示したが、面積は約2万5,000㎡と広大である。これまでに寄居町教育委員会により、道路建設や民間開発に先立つ発掘調査が9次にわたり実施されている。今回の当事業団による調査は第10次調査となる。

これまでの調査の結果、縄文時代前期・中期の集落跡を中心として、古墳時代後期から平安時代、さらには近世にわたる大規模な複合遺跡であることが判明している。

第1～3次調査は、県道熊谷寄居線の拡幅工事に伴い、昭和59～61年度にわたり断続的に行われた。むじな塚遺跡の本格的な発掘調査のはじめである。調査面積は4,000㎡を超え、調査区は遺跡のほぼ中央部を東西に横断するような形で設定された。それは遺跡における長大なトレンチのようでもある。これまでむじな塚遺跡では、表採や部分的な確認調査が行われていたのみで、遺跡の様子はよくわかっていなかったが、この調査により、多くの遺構や遺物が発見され、多大な成果が得られた。

検出された遺構は、住居跡27軒、土壇42基、集石土壇3基にのぼる。時期別にみると、縄文時代前期が住居跡15軒、土壇5基と最も多く、次いで縄文時代中期が住居跡3軒、集石土壇1基、

古墳時代後期が住居跡6軒、奈良時代、平安時代が住居跡各1軒ずつである。それにより、むじな塚遺跡は、縄文時代から平安時代にわたる集落跡であることが明らかとなった。

また、時期ごとに立地に差異が認められた。縄文時代前期の住居跡の多くは、第3次調査区の東半部で検出され、むじな塚遺跡の東に広がる当該期の大集落である東原遺跡との関係が示唆される。縄文時代中期の住居跡は、第1次調査区から第3次調査区の西半部にかけて、古墳時代後期から平安時代の住居跡は、第3次調査区中央部でそれぞれ検出されている。

第4次調査は、民間企業の宅地造成に伴い、昭和63年に行われた。耕作や樹木の伐根などによる攪乱が調査区全面におよび、検出された遺構はわずかに、住居跡3軒のみである。出土遺物も非常に少なく時期判定は難しいが、縄文時代前期と奈良時代の住居跡がそれぞれ1軒ずつである。

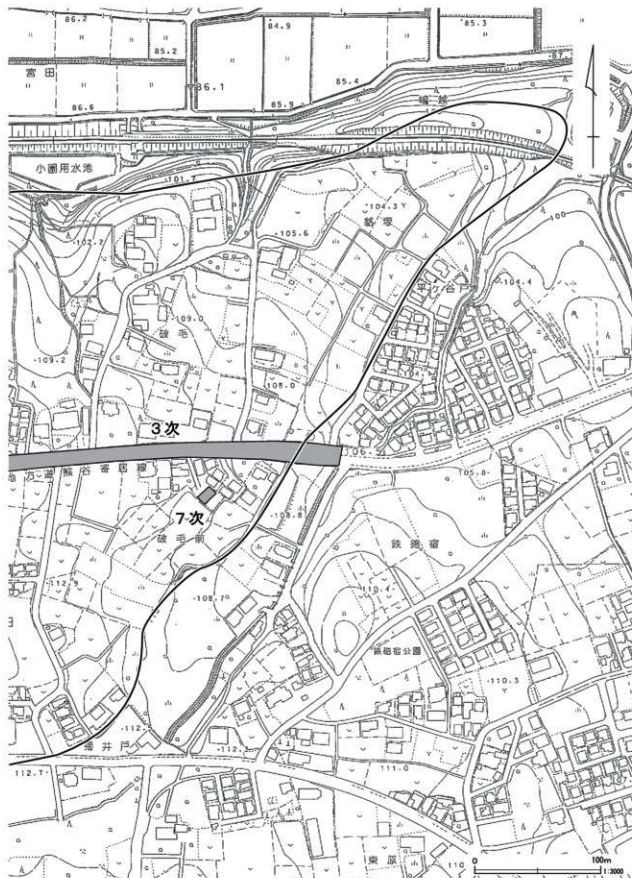
第5次調査は、4次調査同様、民間企業の宅地造成に先立ち、平成元年に行われた。1次調査区の東側に位置し、調査面積はわずかに585㎡だが、調査区全面に遺構が密集しており、検出された遺構は、住居跡20軒、集石土壇6基、土壇10基と非常に多い。時期はすべて縄文時代中期（勝坂～加曾利EⅠ式）である。住居跡からは、器形復元可能な土器が多数出土している。

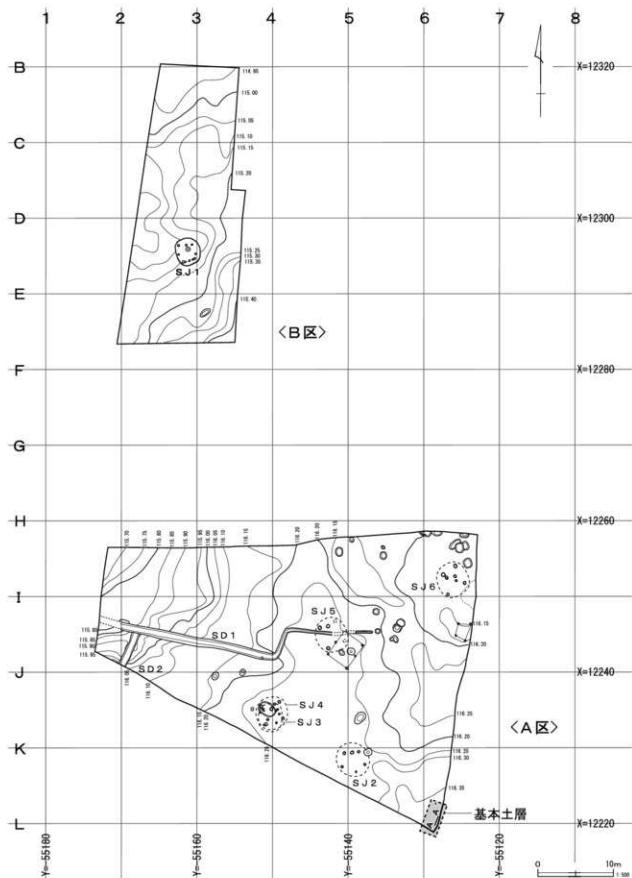
第6次調査も、民間宅地造成の先行調査で、平成2年に行われた。調査区は、ほぼ全面にわたり土砂の採掘等による攪乱がローム面にまでおよび、攪乱を免れた部分からわずかに古墳時代後期の住居跡1軒と江戸時代の井戸跡1基が検出されたのみである。

第7次調査は、個人住宅の建設に伴い、平成3年に行われた。3次調査区の南側で、遺跡の東端近く、東側に向かって緩やかに傾斜する地点であ



第3図 遺跡位置図



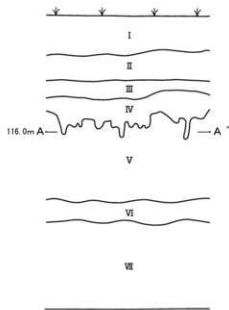


第4図 調査区グリッド配置図

る。100㎡という限られた範囲のため、検出された遺構は、わずかに縄文時代前期の住居跡2軒のみであるが、3次調査で発見された縄文前期集落の続きと考えられる。

第8・9次調査も7次調査同様、個人住宅建設に伴うもので、平成4年に実施された。5次調査区の南側隣接地で、検出された遺構は、住居跡5軒、土壇16基、溝跡1条である。住居跡はすべて、縄文時代中期（勝坂～加曾利E I式）のもので、1～3・5次調査の成果を合わせると、当該期の集落は、5次調査区を中心に遺跡の西部に展開していると考えられる。

今回の第10次調査区は、遺跡の西端で、国道



基本土層

- I 黒色土 黄土
- II 黒褐色土 ローム粒子を若干含む。根による擾乱が進む。
- III 暗褐色土 腐植層。ローム粒子・ロームブロックを含む。
- IV 褐色土 ソフトローム。柔らかく粘性あり。
- V 明褐色土 ハードローム。スコリアを多数に含み、硬い。スコリアは、径1mm以下で、白色・黒色・褐色・黄色である。層の下部30cmには腐化物を多く含む。
- VI 暗褐色土 第2黒色層。粘性が強く、スコリアは確認できない。
- VII 暗褐色土 色調はVI層より明るく、粘性は強い。赤色・黒色スコリアを若干含む。



第5図 基本土層

254号線と県道熊谷寄居線の交差点の北西に位置する。調査区内は概ね平坦であるが、A区は西側へ、B区は北側へ向かってそれぞれ緩やかに傾斜している。標高は115～116mである。

検出された遺構は、住居跡6軒、集石土壇5基、掘立柱建物跡2棟、土壇19基、溝跡2条である。

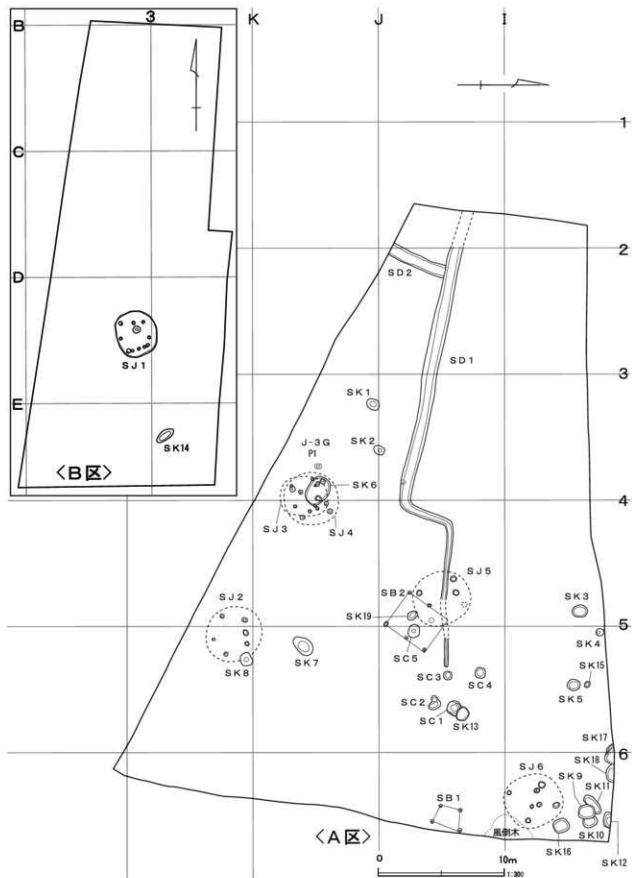
住居跡はA区で5軒、B区で1軒検出された。B区の第1号住居跡以外は、掘りこみを確認できなかったため、出土した遺物は少なかったが、土器はすべて縄文時代中期の勝坂式後半から加曾利E I式にかけてのものである。

集石土壇は、A区の東側中央部、第5号住居跡と第6号住居跡に挟まれた範囲で5基とも検出された。そのうち4基からは、大型の礫が床面に敷き詰められた状態で検出された。中でも第5号集石土壇は、深い掘りこみを持ち、覆土中からは被熱変色した礫が投棄されたような状態で多量に出土した。底部中央には、扁平な砂岩が、それを取り囲むように大型礫が設置され、それらも赤く変色していた。集石土壇からの出土遺物も少なかったが、住居跡とほぼ同一時期と考えられる。

掘立柱建物跡は、集石土壇と同じくA区の住居跡に囲まれた範囲から2棟とも発見された。柱穴に囲まれた範囲内から炉跡が検出できなかったため、掘立柱建物としたが、柱穴の深さも浅く、削平を受けた住居跡の可能性も考えられる。

土壇は、A区北東部と住居跡の周辺で検出された。出土遺物や形態から縄文時代中期の所産と推定される。平面形は、径1m前後の円形と、1.5m前後の楕円形とに分類でき、前者で円柱状の掘りこみを持ち、覆土中から土器や石器が出土しているものは、墓塚と考えられる。

溝跡は、A区中央部から西半にかけて2条検出された。掘りこみが浅く、出土遺物もわずかであるため、時期比定は難しいが、土層などから近世以降と考えられる。



第6図 調査区全体図

IV 遺構と遺物

1. 縄文時代

(1) 住居跡

第1号住居跡 (第7図)

第1号住居跡は、B区のD-2・3グリッドに位置する。平面形態はほぼ円形で、規模は、長軸3.64m、短軸3.19m、深さ0.21mを測る。今回の調査で検出された住居跡のなかで、唯一掘りこみを有する。主軸方位はN-14°-Eを指す。

住居跡の床面はほぼ平坦で、ロームを多量に混入した貼床が施されていた。中央部やや北寄りから炉跡が1基検出された。平面形態は円形で、長軸0.6m、短軸0.55m、深さ0.15mの地床炉である。炉跡底面では、被熱による変色や硬化は認められず、覆土にはほとんど焼土粒子が含まれていなかったことから、炉の使用頻度は低いと考えられる。遺物は、炉跡底面から約3cm浮いた状態で、第8図1が出土した。

柱穴は10本検出された。規模は第2表のとおりである。柱穴の配置から、P1、2、4、5が主柱穴と考えられる。

本住居跡の所属時期は、炉体土器や埋甕が検出されず、出土土器も破片のみであるため、判断はしないが、勝坂式終末～加曾利EⅠ式期と推定される。

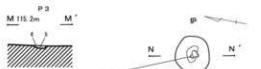
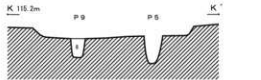
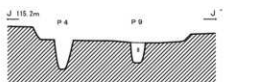
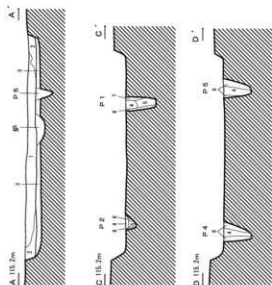
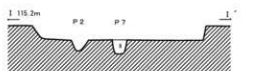
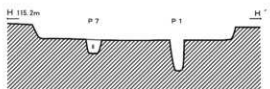
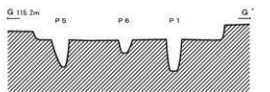
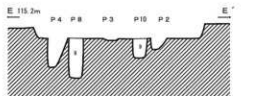
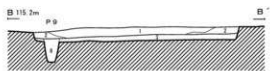
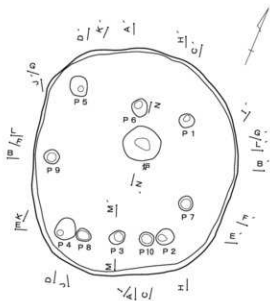
第1号住居跡出土遺物 (第8・9図)

図示できた土器は器形の復元できるものも含めて28点、石器は10点である。

1は、炉跡底面からわずかに浮いた状態で出土した口縁部の破片である。内外面ともに被熱の痕跡は認められないことから、炉体土器ではないと考えられる。胴部との間は隆帯で区画され、口縁部文様帯には隆帯で渦巻文が施されている。左の渦巻文は隆帯を巻き上げて立体的に表現されているのに対し、右の隆帯は、隆帯と沈線とやや平面

的に表出されている。地文には、棒状工具による集合沈線が施されている。口縁部直下には、細い隆帯が波状に添付され、波状の両端を棒状工具で交互刺突し強調している。左の渦巻文から続く隆帯上にも棒状工具による双方向からの交互刺突が施されている。渦巻文の間の口縁部には、突起が付いていたと思われるが欠損している。口縁部文様帯の低位区画隆帯の下にわずかに残る頸部には、地文が施文されているようにみえるが、判断はしない。

2～24は勝坂式の深鉢形土器の破片である。2、3は、隆帯脇に爪形文を施す。2は隆帯による三角区画文の一部と考えられ、区画内には集合沈線文が施文され、区画外には条線による地文が施されている。3には地文は施されていない。4は隆帯上へのみ刻みを持つ土器で、隆帯脇に沈線は伴わない。5～15は、刻みを持つ隆帯の脇に沈線を施文する土器である。特に、5～8は、沈線脇に爪形文を沿わせ、その脇に蓮華文を配する土器である。9は隆帯の下部に集合沈線が施文される。10は隆帯上に刻みが施されておらず、隆帯以下は無文である。12は隆帯脇に爪形文を施文し、それに沈線が沿う。16～23は沈線を主体として文様を描く土器である。16は波状に沈線を施文し、17、18は集合沈線を施す。19～23は半截竹管状工具を使用して並行沈線を施しており、19、23は地文に条線を、22は撚糸文を持つ。22は加曾利E系の土器の可能性も考えられる。20は刻みのない隆帯を持つ。24は口縁部の破片で、垂下する低位の隆帯は非常に高く作られ、口縁部および低位の隆帯上には無節Lの縄文が施文される。隆帯脇に沈線は施されず、地文にも無節Lが斜位に施文される。低位隆帯の口縁部には、突起が付いていたと思われるが欠損している。25～27は地文のみの



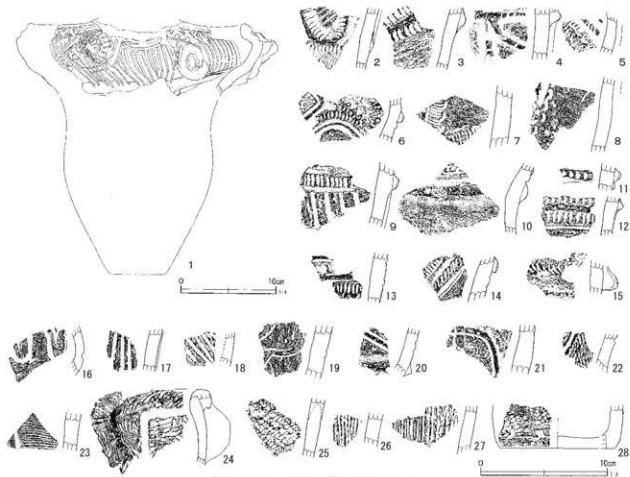
- BS 1**
- 1 暗褐色土 ローム粒子多量、炭化物を少量含む。しまり強
 - 2 暗褐色土 1層とロームの混土層。しまり強（埋納腐土）
 - 3 暗褐色土 1層とロームの混土層。ロームを多量に含む。粘性あり（瓦床土）
- Pit**
- 4 暗褐色土 ロームを塊状に含む。炭化物を微量に含む。（柱状）
 - 5 暗褐色土 炭化物微量。ローム粒子を少量含む。（柱状）
 - 6 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。（人為的埋土）
 - 7 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。（人為的埋土）
 - 8 暗褐色土
 - 9 暗褐色土
- SP**
- 10 暗褐色土 粘土粒子少量。炭化物を微量に含む。
 - 11 褐色土 ローム粒子多量。ロームブロックを少量含む。



第7図 第1号住居跡

第2表 第1号住居跡 柱穴計測表

番号	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	番号	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)
P-1	0.25	0.23	0.49	P-6	0.27	0.24	0.20
P-2	0.29	0.25	0.17	P-7	0.23	0.22	0.21
P-3	0.27	0.21	0.04	P-8	0.24	0.20	0.61
P-4	0.36	0.32	0.43	P-9	0.25	0.23	0.29
P-5	0.33	0.28	0.43	P-10	0.24	0.21	0.28



第8図 第1号住居跡出土遺物(1)

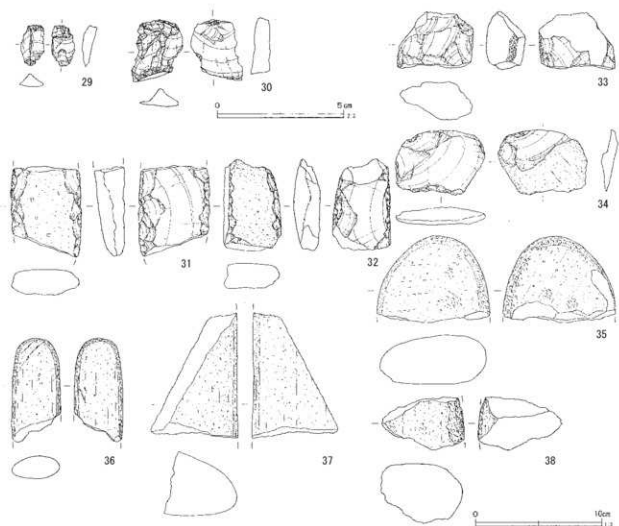
土器である。25は単節縄文RLを横位に、26は燃糸文L、27は条線文がそれぞれ施文される。28は深鉢形土器の底部であり、単節縄文LRの縦位施文である。

29~38は出土した石器である。29、30は楔形石器と考えられる。縦長剥片の上下両側から調整が加えられている。31~33は打製石斧である。いずれも基部と刃部を欠損している。31は残存部から短冊形と考えられる。31、32は表面に大きく自然面が残存している。34はスクレイパーで、剥片の鋭い縁部を刃部として使用している。基部や裏面

には自然面が残存している。35~38は磨石である。35は偏平で、形状は楕円形と考えられる。器面全体を磨面として使用している。縁辺には敲打痕が認められる。36は棒状に近い形状で、偏平なものである。縁辺には敲打痕が認められる。37は全体の形状は不明だが、大型のものである。38は一部のみが残存するもので、縁辺には敲打が顕著に加えられている。

第2号住居跡(第10図)

第2号住居跡は、A区のJ・K-4・5グリッ



第9図 第1号住居跡出土遺物(2)

下に位置する。住居の掘込みは、削平のためか確認できなかった。柱穴の配置から推定される住居跡の規模は、径約4.5mの円形と考えられる。主軸方位はN-13°-Wを指す。

P1、4の間より炉跡が1基検出された。平面形態は楕円形を呈し、長軸0.5m、短軸0.4m、深さ0.08mの地床炉である。炉跡底面から約3cm上の地点より土器片が検出された。深鉢形土器を破砕し、大型の破片を利用し敷きつめた状態で、一部は掘りこみに沿うように立てられていた。検出された土器片には少なくとも3種類の個体が含まれていた。(第11図2～9、12、15、17)今回検出された土器片は炉跡の北東側のみ残存していたが、本来は炉の掘りこみ全体に設置されていた

と考えられる。

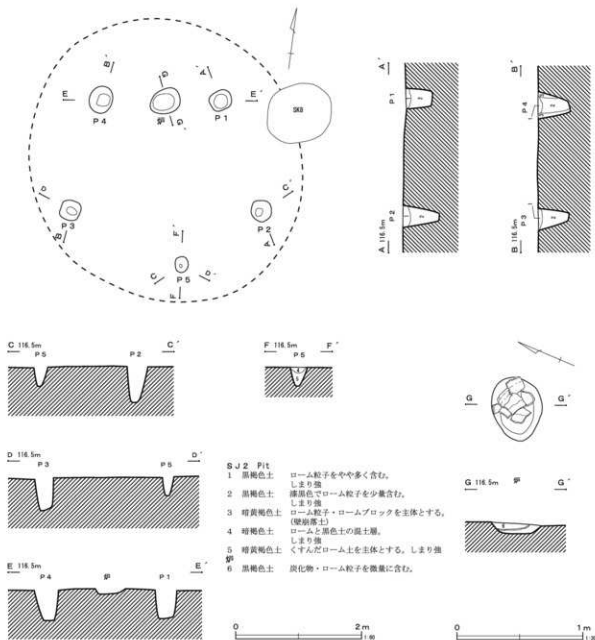
柱穴は5本検出され、規模は第3表のとおりである。配置から、P1、2、3、4が主柱穴と考えられる。

本住居跡の所属時期は、炉跡出土土器から、勝坂式終末～加曾利EⅠ式期と考えられる。

第2号住居跡出土遺物(第11図)

本住居跡から出土した遺物は、土器片のみであり、その多くが炉跡から検出されたものである。(第11図2～9、12、15、17)

1～14は勝坂系の深鉢形土器の破片である。1は結節沈線が弧状に施され、隆帯に沿って施文されていたと考えられる。2は円筒形土器の胴部破



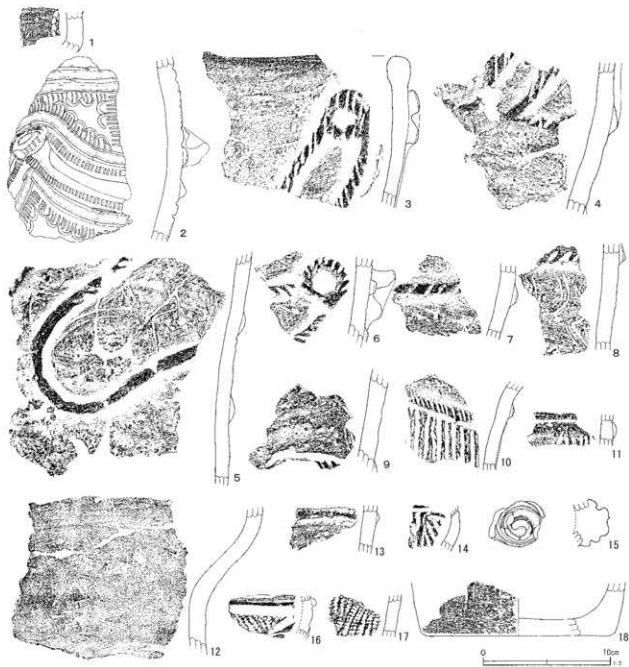
第10図 第2号住居跡

第3表 第2号住居跡 柱穴計測表

番号	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	番号	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)
P-1	0.34	0.32	0.42	P-4	0.45	0.38	0.50
P-2	0.34	0.33	0.57	P-5	0.26	0.21	0.29
P-3	0.31	0.31	0.49				

片でラッパ状の突起が付く。突起から左右2本ずつ刻みを持つ隆帯が弧状に延びる。隆帯脇には並行沈線、爪形文、蓮華文が沿う。内面に被熱の痕跡が認められる。3～9は同一個体で、隆帯で円形装飾や楕円区画を施す。隆帯上には刻みを持ち、

区画内には並行沈線で波状文を描く。1同様内面に被熱の痕跡が残る。10、11、13は隆帯脇に沈線が巡る土器である。10は隆帯上に刻みを持ち、11は隆帯脇に爪形文を配する。12は無文で、内面は被熱痕が著しい。14は沈線で文様を描く土器



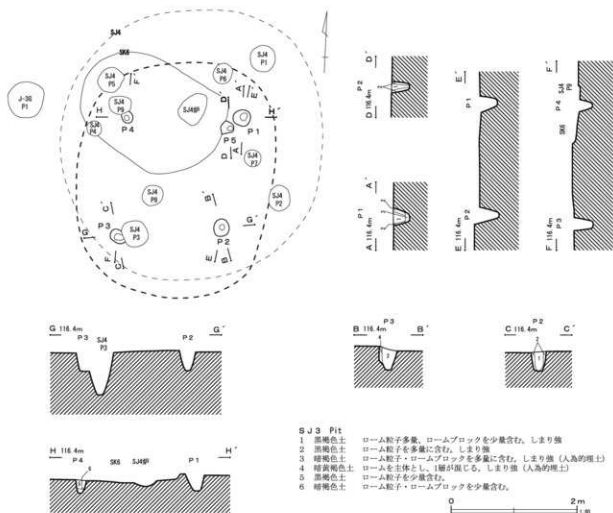
第11図 第2号住居跡出土遺物

で、半截竹管を使用し並行沈線を施文する。15、16は加曾利E系土器である。15は渦巻文を立体的に表現し、隆帯と沈線で構成される。口縁部文様帯に付くものであろう。16は口縁部文様帯の楕円区画部分である。区画内は単節縄文RLを横位施文する。17は地文のみの土器で、単節RLを縦位施文する。18は深鉢形土器の底部で、上端に並行沈線の懸垂文が見える。懸垂文周辺には単節縄文

RLが地文として縦位に施文されているようにみえるが判然としない。底部直上には横方向のナデが確認できた。

第3号住居跡 (第12図)

第3号住居跡は、A区のJ-3・4グリッドに位置し、第4号住居跡、第6号土壇と重複する。出土遺物や柱穴の土層観察から、本住居跡が最も



第12図 第3号住居跡

第4表 第3号住居跡 柱穴計測表

番号	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	番号	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)
P-1	0.28	0.26	0.26	P-4	0.20	0.18	0.21
P-2	0.29	0.25	0.33	P-5	0.22	0.21	0.28
P-3	0.28	0.19	0.31				

古く、続いて第4号住居跡、第6号土壌の順で構築されたことが確認できた。本住居跡も削平のためか掘りこみは確認できず、柱穴配置から推定される住居の規模は、長軸約3.7m、短軸約3.1mの隅丸楕円形と考えられる。主軸方位はN-10°-Wを指す。炉跡は検出できなかった。

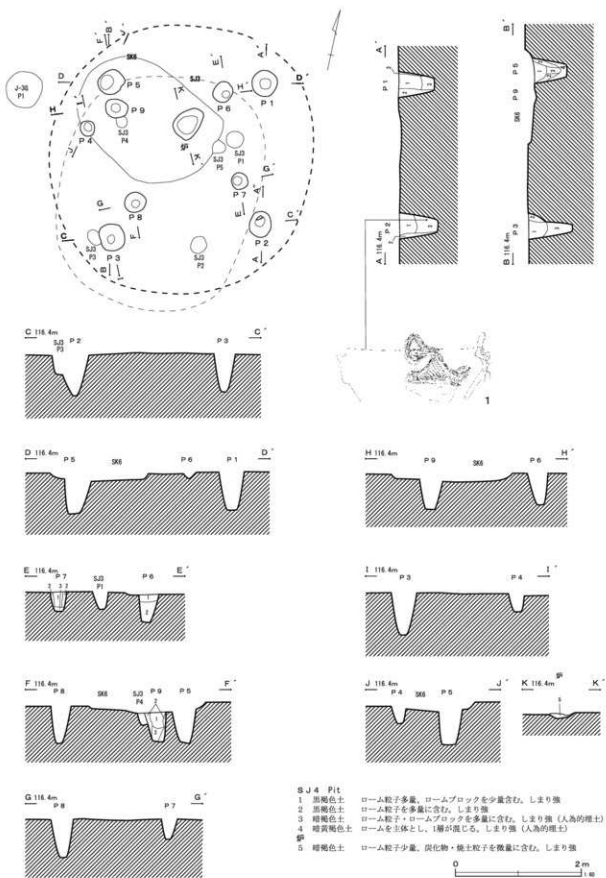
柱穴は5本検出され、その規模は第4表に示した。主柱穴は、P1、2、3、4と考えられる。

本住居跡の所属時期は、遺物が検出できなかったが、第4号住居跡との重複関係や柱穴の配置などの住居形態、覆土の様子などから、勝坂式終末

期以前で勝坂期に納まると推定される。

第4号住居跡 (第13図)

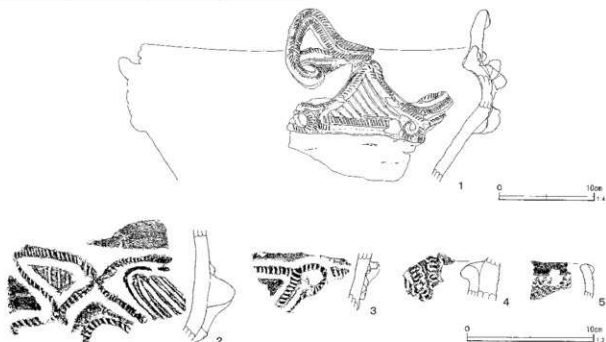
第4号住居跡は、A区のJ-3・4グリッドに位置し、第3号住居跡、第6号土壌と重複する。出土遺物や柱穴の土層観察から、本住居跡は第3号住居跡より新しく、第6号土壌より古いことが確認された。本住居跡も削平のためか掘りこみは確認できなかった。柱穴配置から推定される住居の規模は、径約4.2mの円形で、主軸方位はN-11°-Wを指す。



第13図 第4号住居跡

第5表 第4号住居跡 柱穴計測表

番号	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	番号	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)
P-1	0.41	0.40	0.56	P-6	0.33	0.29	0.45
P-2	0.40	0.34	0.61	P-7	0.28	0.27	0.31
P-3	0.42	0.39	0.70	P-8	0.35	0.31	0.59
P-4	0.25	0.23	0.25	P-9	0.36	0.30	0.47
P-5	0.41	0.37	0.53				



第14図 第4号住居跡出土遺物

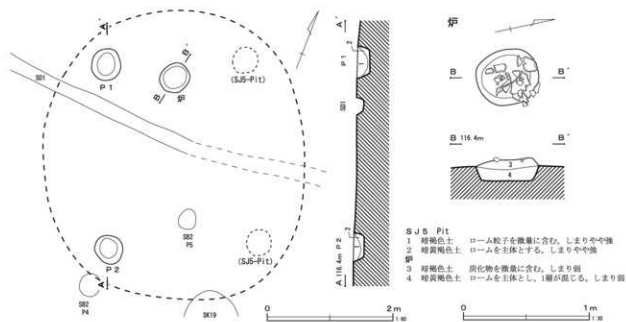
中央部やや北寄り、P6の南から炉跡が1基検出された。平面形態は不整形な楕円形で、長軸0.55m、短軸0.4m、深さ0.1mを測る。地面を掘りくぼめた地床炉で、赤色硬化などの被熱の痕跡は認められないことから、使用頻度は低いと考えられる。

柱穴は9本検出された。柱穴の配置から、本住居跡では拡張が行われたと考えられる。拡張前の住居に伴う柱穴は、P6、7、8、9で、拡張後はP1、2、3、5が想定できる。P2からは第14図1が出土しており、拡張後の新しい住居に伴う遺物と考えられる。それぞれの柱穴規模は第5表のとおりである。

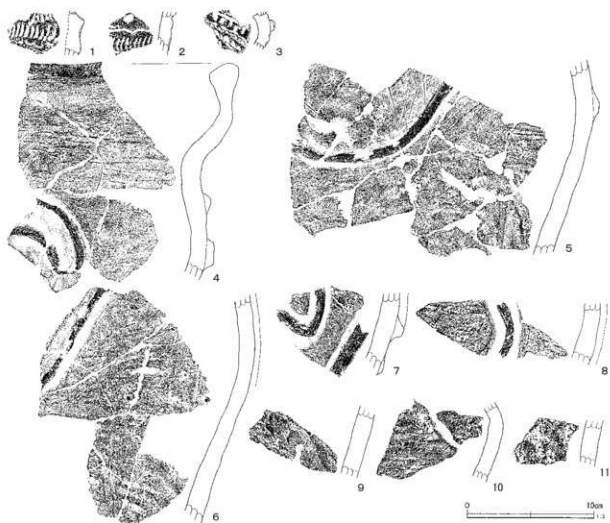
本住居跡の出土遺物は非常に少なく、破片のみで判然としないが、P2より出土した第14図1から所属時期は、勝坂式終末期と想定される。

第4号住居跡出土遺物（第14図）

本住居跡の出土遺物は少なく、そのすべてが柱穴からの出土で、勝坂系の深鉢形土器である。1はキャリバー形で口縁部に文様帯を持ち、頸部が無文となる土器である。口縁部に三角状突起を配し、文様帯は隆帯で三角区画と楕円区画を交互に創出していると考えられる。隆帯上に刻みを有し、隆帯脇は沈線を沿わせる。三角区画内には集合沈線を施し、隆帯と口縁部文様帯の横位区画の交点には双眼状突起を配する。三角区画の頂部にも上に開く突起を付す。2～4は刻みを持つ隆帯脇に沈線を施す土器である。2は隆帯で区画し、区画内に集合沈線を施文する。3は隆帯で円形装飾を施す。4は口縁部の破片で、突起に続く部分と考えられる。隆帯上の爪形文に蓮華文が付く。5も口縁部の破片で、口縁直下に半截竹管でコンパス



第15図 第5号住居跡



第16図 第5号住居跡出土遺物

第6表 第5号住居跡 柱穴計測表

番号	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	番号	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)
P-1	0.52	0.47	0.20	P-2	0.48	0.44	0.15

文を施す。地文は単節縄文RLによって横位に施文している。雲母片を含む。

第5号住居跡 (第15図)

第5号住居跡は、A区のI-4グリッドに位置する。住居の掘込みは削平のためか確認できず、炉跡と柱穴2基のみが検出された。

住居跡中央部を第1号溝跡が東西に延び、南東部では第2号掘立柱建物跡と重複する。第1号溝跡は出土遺物から近世以降の所産である。第2号掘立柱建物跡は縄文時代の遺構と考えられるが出土遺物が少なく、本住居跡との新旧関係は不明である。

柱穴と炉跡の配置から推定される住居範囲は、長軸約4.5m、短軸約4.2mの楕円形を呈すると考えられる。主軸方位はN-23°-Wを指す。

炉跡はP1の東側で検出され、長軸0.5m、短軸0.45m、深さ0.15mを測る。炉跡からは第16図に示した土器が出土した。すべて破片であることから、第2号住居跡の炉のように、深鉢形土器を打ち欠いて破片を設置したと考えられる。

検出された柱穴の規模は、第6表に示したとおりである。

第5号住居跡出土遺物 (第16図)

本住居跡も出土遺物は少なく、すべて炉跡から出土したものである。勝坂系の深鉢形土器の破片

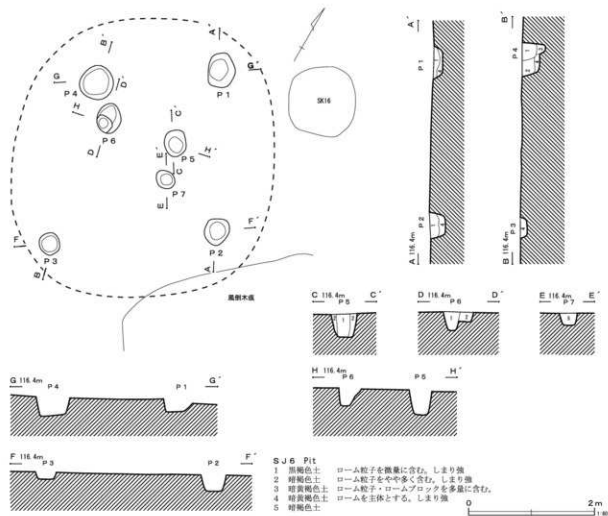
である。1は隆帯脇に爪形文を施文し、蓮華文を沿わせる。2は爪形文の脇に沈線で蓮華文様を描きだしている。上部には補修孔と思われる孔があるが、未貫通である。3は隆帯上に刻みを持ち、その脇に沈線に沿わせた土器であるが、隆帯上の刻みは双方向から交互に施文され、沈線はペン先状結節沈線が一部に施されている。4～8は同一個体である。無文で刻みのない隆帯を円形に配していると思われるが、その全容は不明である。9～11も無文であることから、4～8と同一の個体かもしれない。

第6号住居跡 (第17図)

第6号住居跡は、A区の北東隅、H・I-6グリッドで検出された。掘込みは確認できず、柱穴配置から推定される住居範囲は、長軸約4.4m、短軸約4.1mの円形に近い楕円形と考えられる。主軸方位はN-21°-Wを指す。炉跡は検出できなかった。柱穴は7本検出した。その配置から、主柱穴はP1、2、3、4と推定される。各柱穴の規模は第7表のとおりである。

第6号住居跡出土遺物 (第18図)

本住居跡からの出土遺物は非常に少ない。1、4は爪形文を持つ土器で、1は隆帯脇に爪形文を2列にわたって配する。2、3は無文の口縁部の破片であり、浅鉢の可能性がある。



第17図 第6号住居跡

第7表 第6号住居跡 柱穴計測表

番号	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	番号	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)
P-1	0.56	0.43	0.14	P-5	0.42	0.34	0.37
P-2	0.43	0.38	0.25	P-6	0.49	0.38	0.29
P-3	0.44	0.36	0.10	P-7	0.27	0.32	0.17
P-4	0.55	0.52	0.37				



第18図 第6号住居跡出土遺物

(2) 集土土壌

第1号集土土壌 (第20図)

A区のI-5グリッドに位置する。北東部で第13号土壌と重複しているが、出土遺物が少ないこ

とから、新旧関係は不明である。

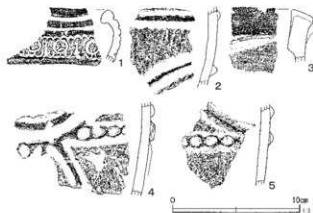
平面形態はほぼ円形で、長軸1.13m、短軸1.00m、深さ0.29mを測る。主軸方位はN-65°-Wを指す。

遺構確認時に既に周辺から礫が多量に検出され、遺構を掘り下げると覆土中からも多量の焼礫が出土した。焼礫で覆土が構成されているような状況であった。焼礫が混入する覆土は、今回検出された集土土壌すべてに共通するが、漆黒色で非常にしまりの強い土である。覆土の礫を取り除くと、

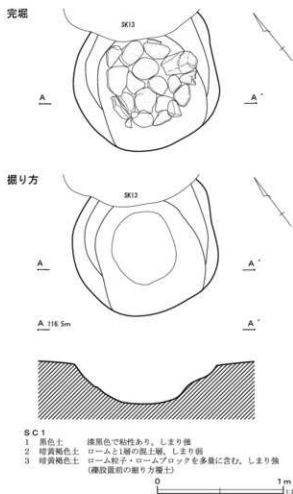
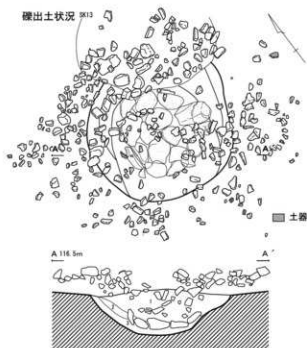
底面には大形の礫が敷き詰められた状態で検出された。大型の礫の表面はすべて熱を受けて赤く変色していた。礫の中には石皿などの石器を転用しているものもみられた。

第1号集石土壇出土遺物 (第19・21図)

1～5は出土した土器である。勝坂式終末～加曾利E1式期にかけてのもので、1は内湾する口縁部の破片である。半截竹管状工具で口縁部に沿って2条の並行沈線を巡らせ区画し、その下部に文様帯を削出している。区画内には地文として爪形文を横立に2列施文した後、円形刺突文を等間隔に施文する。上部区画の並行沈線の下部に沿って半截竹管状工具で連続して蓮華文を施文し、また下部区画の並行沈線の上部には、円形刺突文の下部にのみ3～4個の蓮華文を施文する。円形刺突文の間には、爪形文を縦に仕切りとして施文している。文様帯の下部区画の並行沈線は、1条のみ残存しているが、上部区画が2本であることから下部区画も2本であった可能性が高い。器壁は非常に薄く、内面は丁寧になでて整形している。2は深鉢形土器の胴部破片である。無文の器面に直線と曲線の2本の刻みのない隆帯を貼り付けている。直線の方の隆帯断面は丸みを帯びているが、曲線の方は三角形の断面を呈する。隆帯脇に沈線は施文されていない。3は無文の口縁部の破片である。内面には明瞭な稜があり、口縁部の断面は

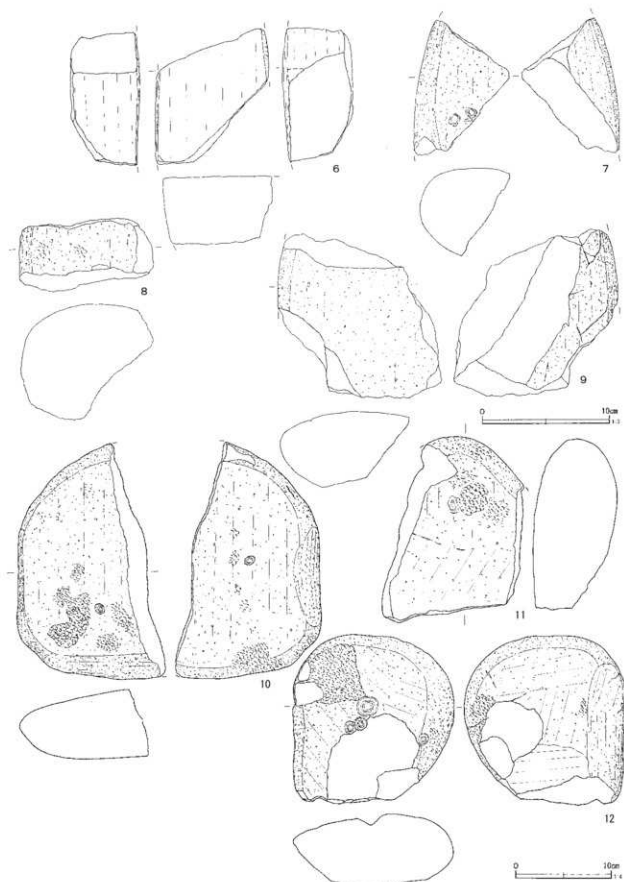


第19図 第1号集石土壇出土遺物 (1)



SC 1
 1 黒色土 漆黒色で粘性あり、しまり強
 2 暗黄褐色土 ロームと1層の黒土層、しまり弱
 3 暗黄褐色土 ローム粒子・ロームブロックを多量に含む、しまり強
 (破砕直前の掘り方層土)

第20図 第1号集石土壇



第21图 第1号集石土壙出土遺物(2)

長方形を呈する。浅鉢の可能性が考えられる。4、5は同一個体である。器面に隆帯を巡らせ、その隆帯の一部を指頭で押さえ、文様効果を出している。地文は無文で丁寧になでて整形している。

6~12は出土した石器である。6は砥石で、平坦面を作り出し、使用面としている。被熱のため、部分的に表面が赤化している。7、9~12は、石皿である。破片のため全体の形状が不明なものが多い。9は破損面も含め、全体が被熱のため赤化している。10~12の表面には敲打痕や凹部が残存している。8は残存部分から、大型石棒の一部と考えられる。

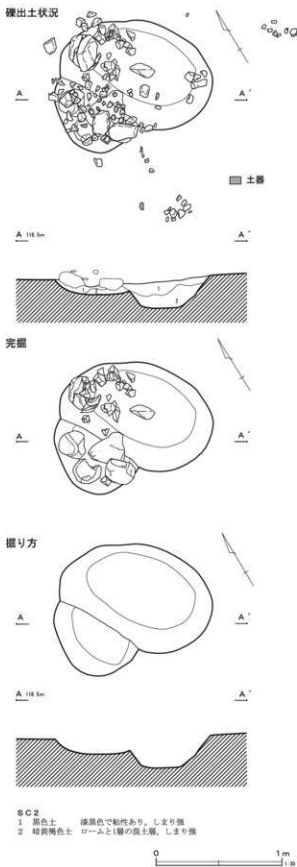
第2号集石土壌 (第22図)

A区の1-5グリッドに位置し、第1号集石土壌の南、約0.5mの地点に所在する。第1号集石土壌と接近して存在しているため、遺構確認時は同一遺構と考えられたが、掘り下げたところ別の遺構であることが確認された。

平面形態は不整形で、楕円形を呈した二つの土壌が重なってハート形を呈する。長軸1.17m、短軸1.12m、深さ0.25mを測る。主軸方位はN-32°-Wを指す。今回検出された5基の集石土壌の中で最も遺存状態が悪く、検出された礫の量もかなり少ない。本来の遺構の底部付近のみの残存で、上部は失われてしまったと考えられる。

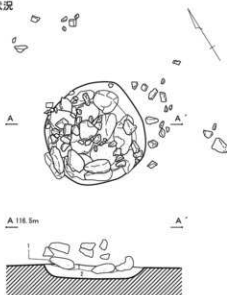
確認面で検出された散在した礫を取り上げると、西側の浅い土壌の上部で大型の礫がまとまって4点、そこから北東にやや離れた場所で破碎した大型礫が1点それぞれ検出された。それらの大型礫の表面は、すべて被熱により赤く変色していた。また、大型礫の検出状況は、幾分まとまっていたが整然と敷き詰められたというような状況ではないことから、使用後、掻き出されて廃棄された、廃棄状況と考えられる。

本遺構から図示できる遺物は検出されなかった。

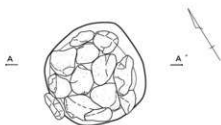


第22図 第2号集石土壌

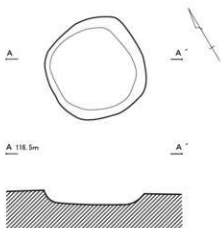
礎出土状況



完形



掘り方



SC3

- 1 黒色土 緑黒色で粘性あり、しまり強
2 暗黄褐色土 10-15cmの混土層、しまり強



第23図 第3号集石土壇

第3号集石土壇 (第23図)

A区のI-5グリッドに位置し、第1号集石土壇と第2号集石土壇の西、約2.0mに所在する。

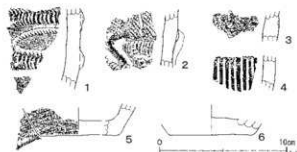
平面形態はほぼ円形で、長軸0.84m、短軸0.80m、深さ0.10mを測る。主軸方位はN-43°-Eを指す。

第2号集石土壇と同様、底部付近のみの残存であり、上部は失われてしまったと推定される。そのため、覆土中からの出土礫はそれ程多くなかった。しかし、それらの礫を取り上げると、底面には第1号集石土壇と同様に、大型の礫が整然と敷き詰められた状態で検出された。それらの大型礫の表面は、すべて被熱により赤く変色していた。また、大型礫と土壇掘り方の間には、充填土層が検出されていることから、大型礫の設置にあたり安定性が求められていたことが推定される。この状況は、今回検出された他の集石土壇にも認められる。

第3号集石土壇出土遺物 (第24図)

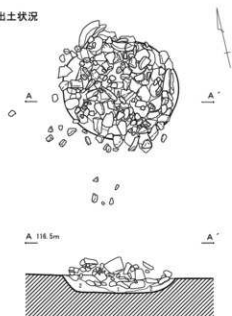
1~6は本遺構から出土した土器である。遺物の出土は少なく、土器片のみであった。

1~4は勝坂系の深鉢形土器の胴部破片である。1は隆帯上に爪形文で刻みを施し、楕円と思われる区画を創出している。区画内には隆帯に沿って、ペン先状結節沈線文を施文する。地文は施文されていない。2は隆帯区画の内側に長さが長く、幅狭の爪形文を施文し、その脇に沈線で蓮華文を描く。区画外には地文が施されている。単節縄文L

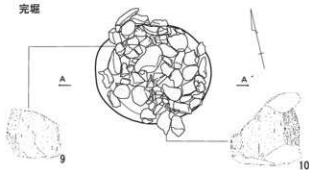


第24図 第3号集石土壇出土遺物

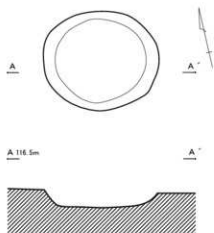
礎出土状況



完壁

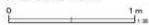


掘り方



SC4

- 1 黒色土 漆黒色で粘性あり。しまり強
- 2 暗黄褐色土 ロームと1層の黒土層。しまり強



第25図 第4号集石土塙

Rの縦位施文である。3は先細状工具による刻みを土器片上部に横位に1条巡らせる。地文は判然としない。4は沈線のみ土器である。集合沈線を直線的に施文している。土器は摩耗が著しく欠け口は丸くなっている。5、6は深鉢形土器の底部である。5の底部直上部分は無文で、横方向のなでがみられる。6は底面のみ残存である。

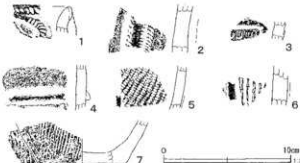
第4号集石土塙 (第25図)

A区の1-5グリッドに位置する。第1号集石土塙の北西約3.0m、第3号集石土塙の北約2.0mの地点である。

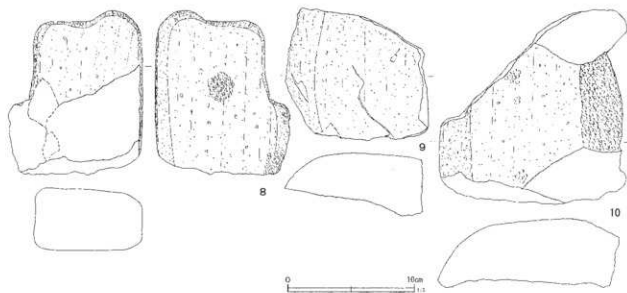
平面形態は円形に近い楕円形で、長軸0.92m、短軸0.79m、深さ0.13mを測る。主軸方位はN-84°-Wを指す。

第2、3号集石土塙と同様に本遺構も深さが0.1m程と浅く、底部付近のみの残存で、上部は失われてしまったと考えられる。しかし、本集石土塙は第3号集石土塙とは異なり、わずかに残された覆土中からも多量の焼礫が検出された。焼礫で覆土が構成されているような状態であった。それらの焼礫を取り上げると、底面からは大形礫を含む、大量の礫が丁寧に敷き詰められたような状態で検出された。その状況は第1、3号集石土塙とは異なり、やや大きめの礫を数点設置した後、隙間を埋めるように小振りの割れた礫を配している。それらの礫はすべて被熱のため、赤く変色している。

第4号集石土塙出土遺物 (第26・27図)



第26図 第4号集石土塙出土遺物(1)



第27図 第4号集石土壙出土遺物(2)

1～7は出土した土器である。1～3は勝坂系の深鉢形土器の破片である。1は口縁部の破片で隆帯上に刻みを持つ。2、3は蓮華文を施文する土器で、2は隆帯脇に爪形文を施し、それに沿って蓮華文を施文する。3は並行沈線と思われる沈線脇に爪形文、蓮華文を施文する。4～6は隆帯を持つ土器で、4は隆帯脇に沈線は施されていない。5は単節縄文R Lの縦位施文、6は撚糸文Lを地文に持つ。5、6は加曾利E式系の破片と考えられる。7は深鉢形土器の底部の破片である。撚糸文Lを施文する。

8～10は出土した石器である。8は磨石で、形状は不定形である。器面全体を磨面として使用している。側縁の一部や、裏面の中央付近には敲打痕が認められる。9、10は石皿である。破片のため全体の形状は不明である。表面の一部には敲打痕が認められる。

第5号集石土壙(第28図)

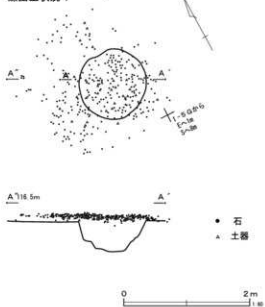
1・4・5グリッドに位置し、第2号掘立柱建物跡のP2のすぐ北西で検出された。平面形態はほぼ円形で、長径1.11m、短径1.06m、深さ0.48mを測り、主軸方位はN-29°-Eを指す。

遺構確認面では、周辺の広い範囲に焼礫、土器片が密集して分布していた。覆土を掘り下げると小礫に交じり、やや大きめの割れた礫が含まれており、出土量はそれ程多くはなかった。恐らく、礫は土壙の中から掻き出されて周辺に散在したと考えられる。覆土中の礫を取り上げると、底面には方形の扁平な砂岩が設置され、それを囲むように大形礫が土壙の壁際に沿って置かれていた。これらの大型礫は被熱で赤く変色していた。

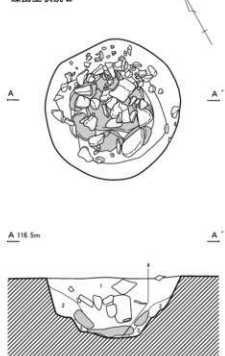
第5号集石土壙出土遺物(第29図)

1～24は出土した土器である。1～7は勝坂系の深鉢形土器の胴部破片である。1～3は隆帯上に刻みを持ち、隆帯脇には沈線が沿う。1は並行沈線脇に爪形文が沿う。4、5は沈線でモチーフを描く土器である。4は弧状に、5は直線的に並行沈線を重ねている。地文は単節縄文R Lの横位施文である。6は横位の隆帯直下に波状の細隆帯を配し、上下方向から交互に刺突を行っている。地文は単節縄文L Rの縦位施文である。7は隆帯上に単節縄文R Lを施している。8～19は加曾利E式系の土器である。8～11は口縁部の破片で、8、10は隆帯と沈線で渦巻文を表現している。8

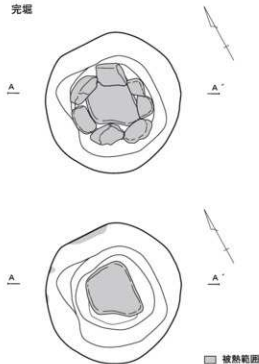
礎出土状況 1



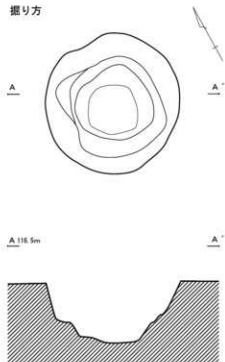
礎出土状況 2



完堀



掘り方



S C 5

- 1 黒色土 練黒色で炭化物・焼土粒子を少量含む。しまり極めて強
- 2 黒色土 ローム粒子・ロームブロックと1層の掘土層。しまり強
- 3 増量褐色土 ロームを主体とし、1層が混入する。(掘を放置するための充填土)
- 4 褐色土 ローム粒子・炭化物を微量に含む。しまり強。1層に近接するが、やや褐色を帯び、しまりも弱い。(再利用される前の増積土)

第28図 第5号集石土壇



第29図 第5号集石土壌出土遺物

は楕円形区画内に摺糸文Rを施文する。9は隆帯で十字に区画し、区画には摺糸文Lを施文する。11は口縁部から縦位に隆帯を2本垂下させる。11~13は同一個体である。14、15は口縁部と胴部の区画する横位隆帯である。16~19は沈線を施す土器であり、地文は16が単節縄文RLを斜位に、17がLRを横位に、18がRLを縦位に、19が摺糸文Lをそれぞれ施している。20~23は地文のみの土器である。20は無節縄文Rを、21は単節縄文RLを斜位に、

22は単節LRを縦位に、23は摺糸文Lを施文する。24は深鉢形土器の底部で、摺糸文Lを施文する。

25~28は出土した石器である。25は打製石斧である。刃部は欠損している。残存部から、刃部に最大幅を持つ撥形の形状であると考えられる。基部に自然面が残存している。26~28は磨石である。27は縁刃に敲打が顕著に加えられるものである。27、28は、破片のため全体の形状は不明である。石皿の一部である可能性も考えられる。

(3) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第30図)

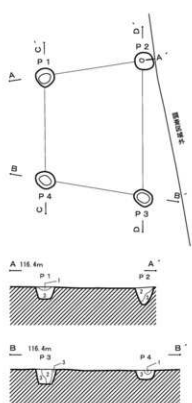
A区の1-6グリッド、調査区東端近くに位置する。確認された範囲は1間×1間であり、台形ともいえる程の不整形である。柱間距離はP1～P2間が1.55m、P2～P3間が2.15m、P3～P4間が1.55m、P1～P4間が1.65mを測る。主軸方位はN-20°-Eを指す。柱穴覆土のうち第1層と第2層は柱痕と考えられる。本遺構からは図示できる遺物は出土していないが、覆土の様子や周辺の遺構検出状況などから、所属時期は縄文時代中期の可能性が高いと考えられる。

第2号掘立柱建物跡 (第31図)

A区の1-4・5グリッドに位置する。建物跡

が推定される範囲内には、第5号住居跡、第5号集石土壇、第19号土壇、第1号溝跡が検出された。柱穴は5基検出され、2間×1間の建物跡と推定されるが、第1号溝跡との交わり付近に径1m程の木根による攪乱があり、北隣の柱穴は検出されなかった。柱間距離はP1～P2間が1.90m、P2～P3間が1.85m、P3～P4間が3.28m、P4～P5間が1.80m、P2～P5間が3.28mを測る。主軸方位はN-34°-Eを指す。柱穴覆土のうち、第1、2層は柱痕、第3、4層は建物構築時の柱の裏込め土と考えられる。本遺構の所属時期は、出土遺物がわずかであるため判然としませんが、周辺の検出遺構から縄文時代中期と考えられる。

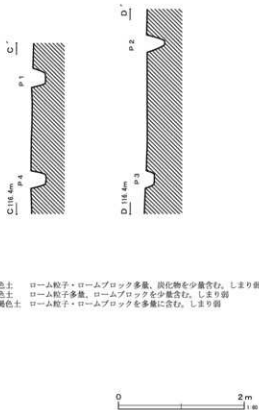
第2号掘立柱建物跡出土遺物 (第32図)



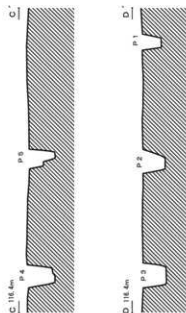
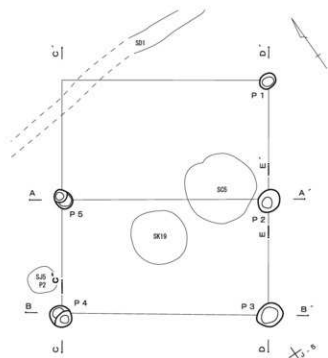
第30図 第1号掘立柱建物跡

第8表 第1号掘立柱建物跡 柱穴計測表

番号	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	番号	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)
P-1	0.15	0.15	0.10	P-3	0.15	0.13	0.07
P-2	0.15	0.13	0.14	P-4	0.16	0.08	0.12



- SB1
 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量、炭化物を少量含む、しまり弱
 2 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロックを少量含む、しまり弱
 3 明黄褐色土 ローム粒子・ロームブロックを多量に含む、しまり弱



SB2

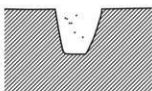
- 1 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロックを多量に含む、しまり餅1層よりローム粒子を多量に含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒子少量、ロームブロックを多量に含む。(人為的埋土)
- 3 黒褐色土 ロームを主体に黒褐色土が少量混入する。(人為的埋土)
- 4 暗黄褐色土



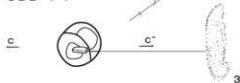
SB2 P2



E 116.4m E'



SB2 P4



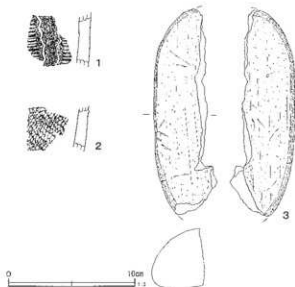
C 116.4m C'



第31図 第2号据立柱建物跡

1～2は出土した土器である。勝坂系の深鉢形土器の胴部破片であると思われる。1は、P2から出土した土器片で、爪形文を施文した脇に沈線で蓮華文を配する。爪形文の左右には沈線、隆帯が付されていたと思われる。2は、P4から出土した土器片で、単節縄文RLを横位に施文した地文のみの土器である。

3は、P4から出土した石器である。底面から0.15mほど浮いた状態で出土した。器種は磨石で、右半分を欠損する。表裏面を磨面として使用している。棒状に近い形状で、周縁全体に敲打痕が認められることから、敲石であった可能性も考えられる。



第32図 第2号掘立柱建物跡出土遺物

第9表 第2号掘立柱建物跡 柱穴計測表

番号	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	番号	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)
P-1	0.14	0.12	0.15	P-4	0.18	0.16	0.2
P-2	0.2	0.16	0.18	P-5	0.17	0.14	0.2
P-3	0.22	0.18	0.17				

(4) 土壌

土壌は、19基が検出された。形状は円形、および楕円形のもので、比較的浅い掘り込みのものが多い。A区北東隅と住居跡の周辺に集中して所在している。第3、4、5、7、8、19号土壌からは遺物が出土しなかったが、覆土の色調などから縄文時代の所産と推定される。また、各土壌の検出位置や規模などは、第10表に示したとおりである。

第1号土壌・出土遺物 (第33・36図)

J-3グリッドに位置する。本遺構の所属時期は、出土遺物がわずかなため判然としないが、縄文時代の所産と考えられる。円柱状の深い掘りこみを有することから墓壇の可能性も考えられる。

第36図1は、土器片である。無節縄文Rを横位に施文する。下端に横位の刺突列が認められる。前期諸磯式である。2は覆土の中層より出土した礫器である。大型のもので、自然礫に調整を加えて加工したものである。基部と刃部は欠損している。側縁には、細かな調整が施されている。左側

縁には自然面が残存している。

第2号土壌・出土遺物 (第33・36図)

I・J-3グリッドに位置する。出土した石器から、本遺構の所属時期は、縄文時代と考えられる。

第36図3は磨石である。底面近くから出土した。表面は被熱のため赤化している。不定形のもので、平坦面を磨面として使用している。部分的に敲打痕が認められる。

第6号土壌・出土遺物 (第33・35・37・38図)

J-3・4グリッドに位置し、第3号住居跡、第4号住居跡と重複するが、土層観察や出土遺物などから、本遺構が最も新しいことが確認できた。本遺構の所属時期は、出土遺物から縄文時代中期加曾利EⅠ式期と考えられる。

第37図1～30、第38図31～42は土器である。1、24、25は同一個体で、勝坂系終末期の土器である。刻みを持つ隆帯脇に沈線に沿わせ、器面に沈線で鋸歯状文を描く。地文は単節縄文LRを横

位に施文する。2～8は加曾利E系の土器である。2～5は口縁部文様帯に渦巻文と区画を持つ口縁部破片で、加曾利E I式である。口縁部文様帯の区画から、若干2、4が古く、3、5が後出的と考えられる。6～8は胴部下半から底部の土器である。6は単節RLの縦位施文を地文とし並行沈線で懸垂文を垂下させる。正面の2本の懸垂文は胴部下半で逆U字状に繋がる。このように逆U字状に繋がる懸垂文が1本おきに表現されている。7は半截竹管状工具で並行沈線を左から右方向へ施文する。8は並行沈線を施文後、隆帯で2本一對の懸垂文を垂下させる。隆帯間には沈線でモチーフが描かれる。9は半截竹管による横位方向の押引文が5段確認できる。五領ヶ台式と考えられる。10～30は勝坂式終末期の破片である。10～15、17、23は隆帯上に刻みを持ち、隆帯脇に沈線は施されないが、16、18～22、24、25は隆帯脇に沈線が沿う。13は隆帯による円形装飾が付く。14は表裏に文様が施されており、突起部分と考えられる。16、17には蓮華文が施文される。26、27は突起である。28は沈線のみが施される土器である。29は隆帯上に縄文が施文される土器で、隆帯上、地文ともに複節RLRを施す。30は櫛状工具で隆帯上に斜位に刺突を施し、擬縄文としている。31～37は加曾利E系の土器である。31～33、37は口縁部の破片であるが、前者は隆帯と沈線で渦巻文と区画を構成し、後者は沈線のみで渦巻文を描く。34、35は隆帯を持つもので口縁部文様帯の一部である。36は沈線で懸垂文を施す胴部破片である。38～40は地文のみの土器で、38は単節RLの縦位施文、39はRLの斜位施文、40はRLの横位施文である。41、42は土製円盤であり、41は燃糸文Lを施文し、42は無文である。

第38図43～50は出土した石器である。43、44は黒曜石製の剥片である。45～48は打製石斧である。45、46は、刃部に最大幅を持つもので、側縁から丁寧な調整を施し形状を作り上げている。刃

部は丸刃である。47は基部のみ、48は刃部のみが残存している。49は磨石である。器面全体を磨面として使用している。先端部は破損後に磨面として使用されている。50は石皿である。破片のため、全体の形状は不明である。

第9号土壌・出土遺物 (第33・36図)

H-6グリッドに位置する。第10、11号土壌と重複し、土層から第10号土壌より新しいことは確認できたが、第11号土壌との新旧関係は不明である。所属時期は、出土遺物がわずかなため判然としないが、概ね縄文時代中期と考えられる。

第36図4～7は土器である。4、7は口縁部破片で、4は口縁に沿って沈線を2条巡らせる。7は無文で、浅鉢の可能性が考えられる。5は隆帯脇に沈線を施し、爪形文を配する勝坂終末期の土器である。6は沈線を施す中期後半の土器と考えられる。

第10号土壌・出土遺物 (第33・36図)

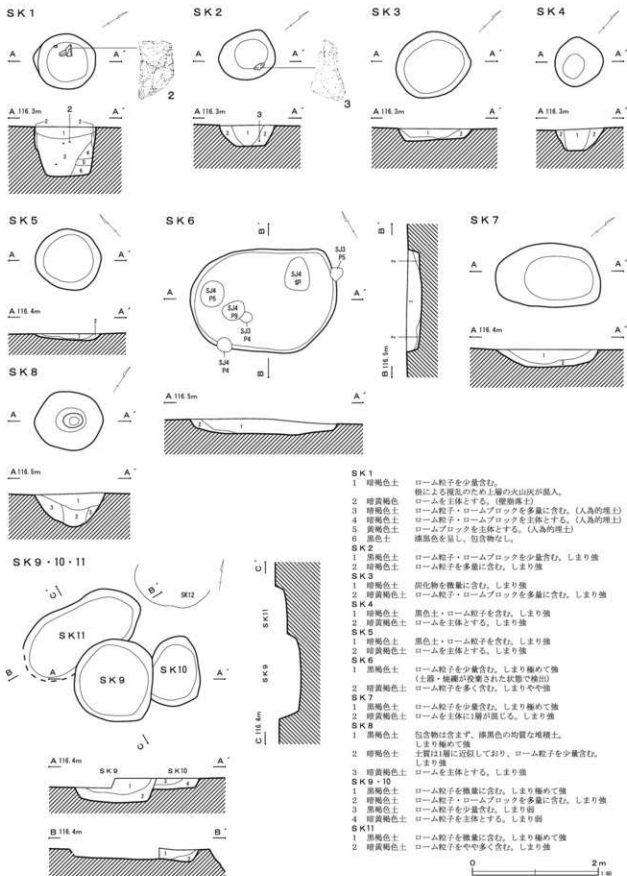
H-6グリッドに位置し、第9号土壌に西側を壊されている。出土遺物がわずかなため判然としないが、本遺構の所属時期は概ね縄文時代中期と考えられる。

第36図8、9は土器である。8は加曾利E系の口縁部区画内の土器で、9は黒浜期の底部片である。10は出土した打製石斧である。刃部のみが残存している。裏面に大きく自然面が認められる。

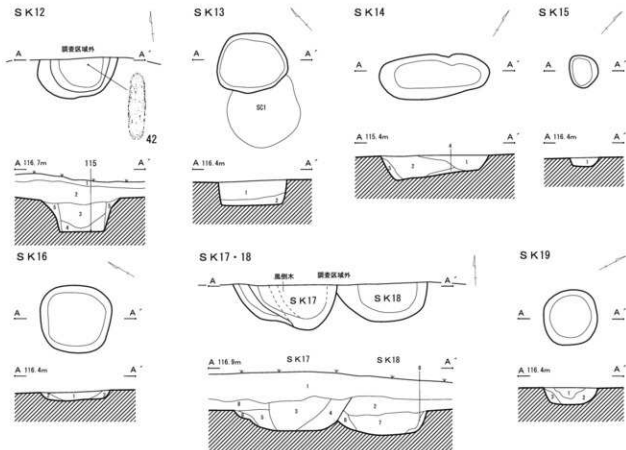
第11号土壌・出土遺物 (第33・36図)

H-6グリッドに位置し、第9号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。出土した遺物から、所属時期は縄文時代中期と考えられる。

第36図11～16は土器である。11は隆帯脇に蓮華文を施し、区画内には櫛状工具で刺突を行う。12は円形装飾を施し、地文には無節Rを施文する。13は突起で口唇に刻みを有する。14、15は地文の



第33図 土壌(1)



- SK12**
 1 黒褐色土 表土
 2 暗褐色土 遺構検出面の上層
 3 暗褐色土 粘土粒子をやや多く、ローム粒子少量、炭化物を微量に含む。
 4 黒褐色土 ローム粒子をやや多く含む。しまり弱
 5 褐色土 ローム粒子を多量に含む。しまり弱
- SK13**
 1 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量、炭化物を微量に含む。しまり強 (人為的埋土)
 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量、炭化物を微量に含む。しまり極めて強 (人為的埋土)
- SK14**
 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロックを含む。横による擾乱が顕著
 2 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。しまり強
 3 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。しまり弱
 4 暗褐色土 ロームを主体とし、2層が混入する。しまり弱
- SK15**
 1 黒褐色土 ローム粒子を微量に含む。しまり極めて強
 土器片・小礫を含む

- SK16**
 1 黒褐色土 炭化物・焼土粒子を含む。土器片・石器・礫を含む
 2 暗褐色土 1層とロームの混土层。
 3 暗褐色土 1層とロームの混土层。ロームの混入率が2層より高い
 4 黄褐色土 ややくすんだロームを主体とする。
 5 褐色土 しまりのないロームを多量に含む。
- SK17・18**
 1 褐色土
 2 暗褐色土 しまりに欠け、1層との混土化が進む。遺物を若干包含する。
 遺構検出面の上層
 3 暗黄褐色土 ロームを主体とする。(風倒埋土)
 4 黒褐色土 ローム粒子を多量に含む。しまり強
(風倒埋土だが、遺構の覆土を山出しする)
 5 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。しまり強 (土壌礫土)
 6 暗黄褐色土 ロームを主体とする。しまり弱 (埋納層土)
 7 暗褐色土 ローム粒子・炭化物を微量に含む。しまり強
 8 暗黄褐色土 ロームを主体とし、1層が混入する。しまり弱
- SK19**
 1 暗黄褐色土 ローム粒子・ロームブロックを少量含む。
 2 暗黄褐色土 ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。
 3 黄褐色土 ロームを多量に含む。

第34図 土坑(2)

みの土器で、14は無節Rを施文する。15は複節L・R Lと思われるが判然としない。16は深鉢形土器の底部である。17は出土した打製石斧である。基部の一部が残存している。肉厚のもので、表面には大きく自然面が認められる。

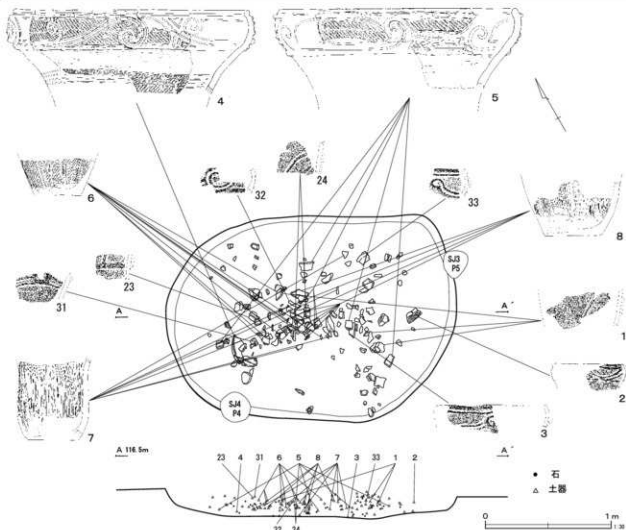
第12号土坑・出土遺物(第34・39図)

H-6グリッドの調査区北東隅に位置する。北

半は調査区外に続いている。出土遺物から、本遺構の所属時期は、縄文時代中期の勝坂終末期と考えられる。第39図1~40は土器である。1は口縁部にラック状の突起が付く。突起上部と隆帯上に刻みを持ち、隆帯脇には爪形文を配する。2、3は同一個体で、口縁部に爪形文を配し、地文に単節R Lを横位施文する。4~7は隆帯上に刻みを持ち、その脇に爪形文を沿わせる。8~17は隆

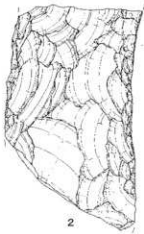
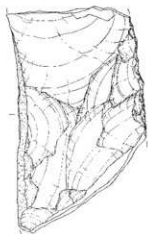
第10表 土壌計測表

番号	グリッド	平面形態	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	主軸方位	備考
SK-1	J-3	円形	0.99	0.88	0.78	N-35°-E	
SK-2	I・J-3	楕円形	0.87	0.72	0.33	N-15°-E	
SK-3	H-4	楕円形	1.15	1.00	0.21	N-8°-E	出土遺物なし
SK-4	H-5	円形	0.78	0.76	0.33	N-48°-E	出土遺物なし
SK-5	H-5	円形	1.00	0.97	0.10	N-7°-E	出土遺物なし
SK-6	J-3・4	長方形	2.32	1.63	0.23	N-61°-W	
SK-7	J-5	長方形	1.65	1.01	0.28	N-37°-E	出土遺物なし
SK-8	K-5	円形	1.10	0.92	0.51	N-56°-E	出土遺物なし
SK-9	H-6	円形	1.30	1.24	0.39	N-8°-W	
SK-10	H-6	楕円形	1.13	(0.77)	0.17	N-4°-E	
SK-11	H-6	長方形	(2.06)	(1.02)	0.21	N-56°-E	
SK-12	H-6	円形	1.24	(0.60)	0.45	N-87°-W	
SK-13	I-5	楕円形	1.10	0.96	0.38	N-45°-W	
SK-14	E-3	長方形	1.78	0.70	0.37	N-56°-E	
SK-15	H-5	楕円形	0.54	0.46	0.14	N-70°-W	
SK-16	H-6	円形	1.17	1.14	0.13	N-33°-W	
SK-17	H-5・6	不整楕円形	1.62	(0.70)	0.30	N-89°-E	
SK-18	H-6	楕円形	1.44	(0.58)	0.37	N-89°-W	
SK-19	I-4	円形	0.85	0.86	0.27	N-27°-E	出土遺物なし

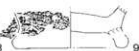


第35図 第6号土壌遺物出土状況

SK 1



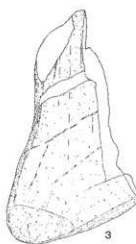
SK 10



SK 11



SK 2



SK 14



SK 15



SK 9

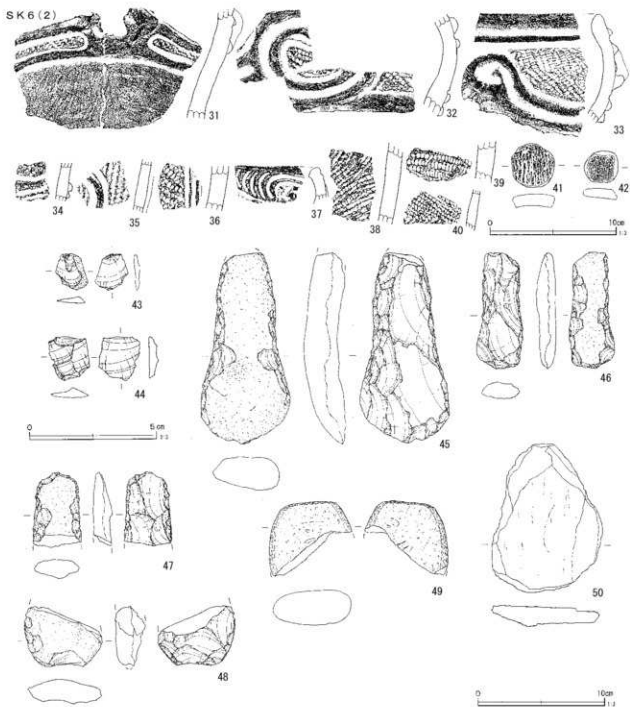


第36図 土坑出土遺物(1)

SK6(1)



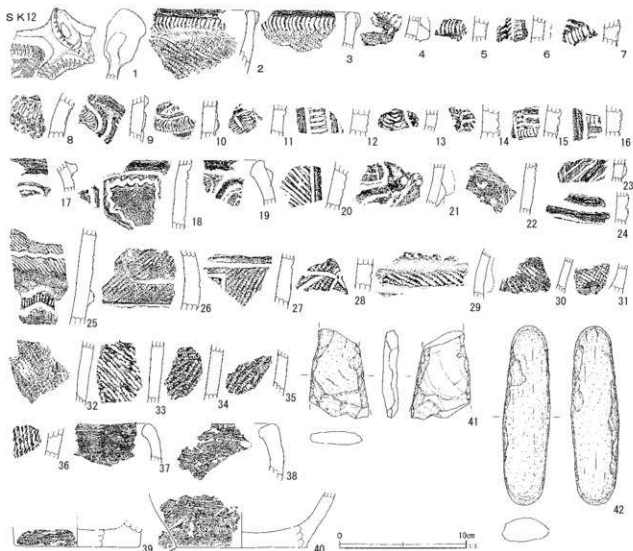
第37图 土壙出土遗物(2)



第38図 土壙出土遺物(3)

帯脇に沈線を施し、その脇に爪形文を配する。18は沈線脇に爪形文ではなく、沈線で波状文を描く。蓮華文を意識した文様と考えられる。19～24は並行沈線でモチーフを描く土器で、19、21、23は隆帯も付く。25～28は縄文地文の土器に沈線でモチーフを描く。25は隆帯上に刻みを有する。29は隆帯上に単節RLを施文する。30～36は地文のみの

土器で、33は無節R、36は燃糸文L、それ以外は単節RLを施文する。37、38は浅鉢の口縁部破片である。39、40は深鉢形土器の底部である。39は底面のみで、40は器面を工具でこすったような痕跡が認められる。41、42は出土した石器である。41は、打製石斧である。基部と刃部を破損している。破損後、刃部側より再加工が施されている。



第39図 土壌出土遺物(4)

る。42は、敲石である。棒状の形状で、縁辺部を使用してあり、敲打痕が認められる。表裏面は磨面としても使用されている。

第13号土壌・出土遺物(第34・40図)

1-5グリッドに位置し、第1号集石土壌と重複している。円柱状のやや深い掘りこみを有しており、墓塚の可能性が示唆される。出土した遺物から、縄文時代の所産と考えられる。1~3は出土した石器である。1は黒曜石製の剥片で、表面の一部に風化面が認められる。2、3は石皿である。2は不定形のもので、表裏面には敲打痕が認められる。3は表裏面に多数の凹部が認められる

もので、その周辺には敲打痕が残存している。

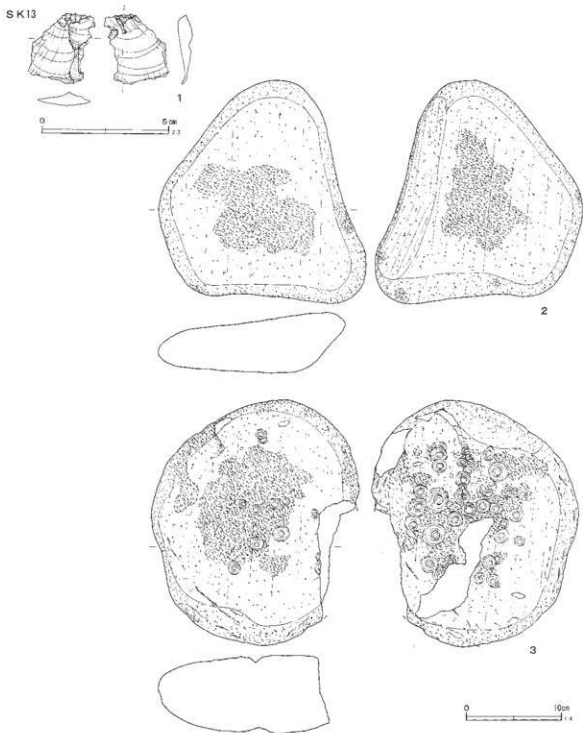
第14号土壌・出土遺物(第34・36図)

E-3グリッドに位置する。所属時期は、出土遺物がわずかなため判断としないが、縄文時代と考えられる。

第36図18は土器で、沈線で方形モチーフを描く。19は打製石斧である。基部のみが残存している。全体の形状は不明である。

第15号土壌・出土遺物(第34・36図)

H-5グリッドに位置する。出土した遺物から、縄文時代中期後半の所産と考えられる。



第40図 土壙出土遺物(5)

第36図20～23は土器で、20、21は加曾利E系の磨消懸垂文を持つ。22、23は地文のみで、22は条線を、23は単節LRを縦位に施文する。

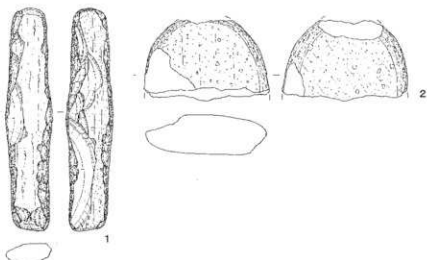
第16号土壙・出土遺物(第34・41図)

H-6グリッドに位置する。本遺構の所属時期

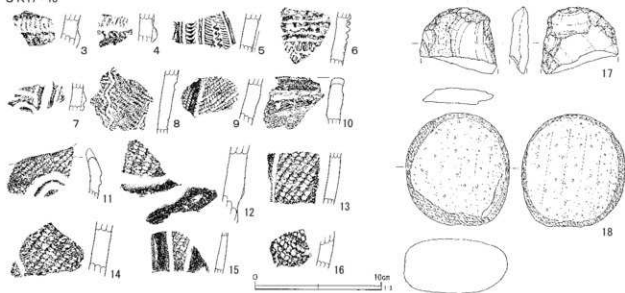
は、出土した遺物から概ね縄文時代と考えられる。

第41図1、2は石器である。1は敲石で、偏平な棒状のもので、縁辺には敲打痕が廻っている。また、敲打のため縁辺に沿って、剥離が認められる。2は磨石である。偏平なもので、器面全体を磨面として使用している。

SK16



SK17・18



第41図 土壌出土遺物(6)

第17、18号土壌・出土遺物(第34・41図)

H-5・6グリッドに位置する。北半は調査区外へ続いているため、全容は不明である。中央部を風倒木痕で攪乱されているため、第17、18号土壌の新旧関係は確認できなかった。出土した遺物から、縄文時代中期と考えられる。

第41図3～16は土器である。3～9は勝坂系土器で、3は隆帯脇に爪形文を施す。4は刻みを持つ隆帯脇に爪形文を配する。5、6は隆帯脇に沈線、爪形文、蓮華文を施す。7は隆帯と沈線で弧状のモチーフを施す。8、9は縄文を施した土器で、8は単節RLの縦位施文を地文として、

波状沈線を垂下させる。9は前々段反摺りの縄LRRを隆帯上、および地文に施文する。10は口縁部の破片で無文である。11～15は加曾利E系土器である。11は口縁部で波状を呈する。12は口縁部文様帯の区画の一部である。13～15は胴部の破片で、単節RLを縦位施文後、磨消懸垂文を施す。16は地文のみの土器で、単節RLを施文する。

17、18は石器で、17は打製石斧の基部の破片である。18は第17号土壌から出土した磨石である。表裏面を磨面として使用されている。周縁には敲打が顕著に加えられている。

(5) グリッド出土遺物

(a) 土器

遺物は縄文時代の遺構である堅穴住居跡や土壌が検出された範囲に分布しており、BグリッドおよびH・I-1~3グリッドでは検出されていない。遺跡から出土した土器群はほぼ中期の所産で、わずかに1点後期の土器片が確認された。

第1群土器 (第42・43・44図64~82・84~114)

勝坂系の土器群を一括する。

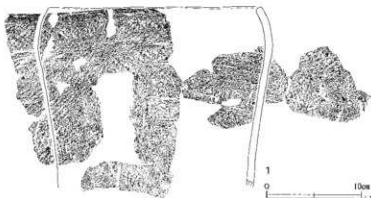
第42図1はI-6グリッドから出土した。文様はやや判然としなが、口縁部に単節R L、その下部に無節Lを施文する粗製土器である。

第43図2~17は、角押結状結節沈線や隆帯脇に爪形文を施文するもので、勝坂式終末期の古相と考えられる。2は口縁部直下と隆帯に沿って角押状結節沈線を施す。2、3は結節沈線で鋸歯状のモチーフを描く。5~9は刻みを持たない隆帯に沿って爪形文を施す。9の隆帯下には結節沈線文が2条確認できる。10~17は刻みを持つ隆帯脇に爪形文を配す。15~17の爪形文はやや幅広いキャタピラ状を呈する。

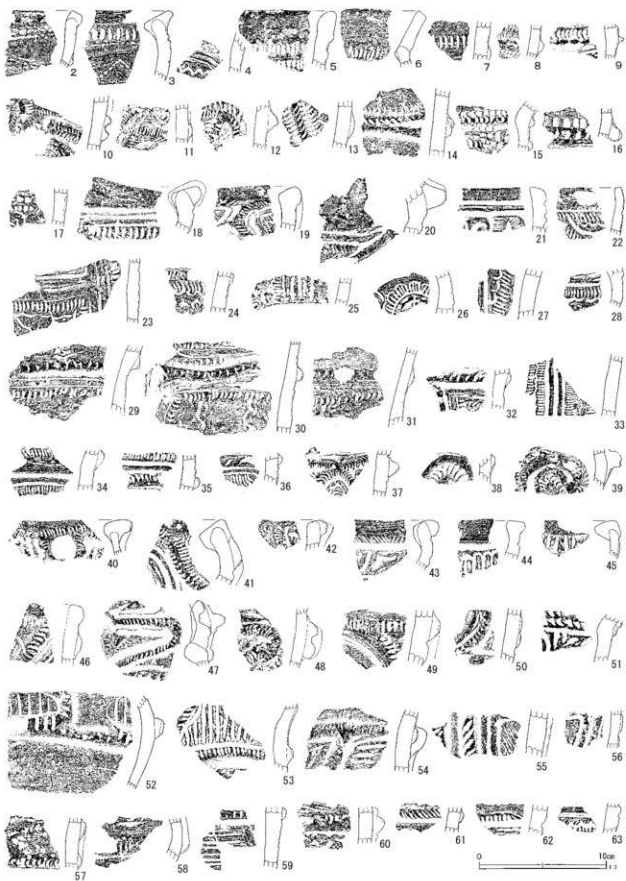
18~82は刻みを持つ隆帯脇に沈線を施文するもので、勝坂式終末段階の土器群である。18、19は口縁部の破片で、口縁部には隆帯を貼り付け肥厚させている。20の隆帯は右側にいくにつれて肥厚していることから、欠損部分に立体的な装飾が施されていた可能性が考えられる。21は沈線によるモチーフが描かれている。22~28、37、40、63は爪形文脇に蓮華文を施文する。29~32は同一個体で、区画内には並行沈線で垂下する波状文を施文する。33は爪形文間に沈線で縦位に鋸歯状の波状文を施す。34~37、40~42、46、48~50、60~63は刻みを持つ隆帯脇に並行沈線を施文する。39は隆帯上に沈線を引き、その脇に爪形文を施文する。40~

47は口縁部の破片で、口縁部断面を方形、あるいは三角形に肥厚させている。40は口縁部直下に刻みのある隆帯で円形装飾を施す。43は沈線でモチーフを描いている。44、45は縦位の集合沈線を施し、44は集合沈線の上端部に蓮華文をあしらっている。47は口縁部に付く突起の一部で、隆帯を蛇行させてモチーフを創出している。51は隆帯に斜下位からの刺突を加え、区画内には沈線で文様を描いている。52~59は文様描出がやや簡素化する土器群である。52~55、57~59、75~82は隆帯主導型の文様構成であるが、隆帯上の刻みがやや減少する。52は口縁部に文様帯を持ち、頸部が無文となる土器で口縁部文様帯の区画内には、縦位の並行沈線を施す。53~55、59にも区画内に集合沈線を施文する。56は沈線で文様を描くもので、並行沈線内に刻みを有する。75~77は同一個体で、隆帯上の刻みが短く、施文間隔も広い。78は頸部が無文となる土器で、口縁部文様帯との横位区画隆帯上に斜位刺突を施す。81は横位隆帯のみ貼付する。

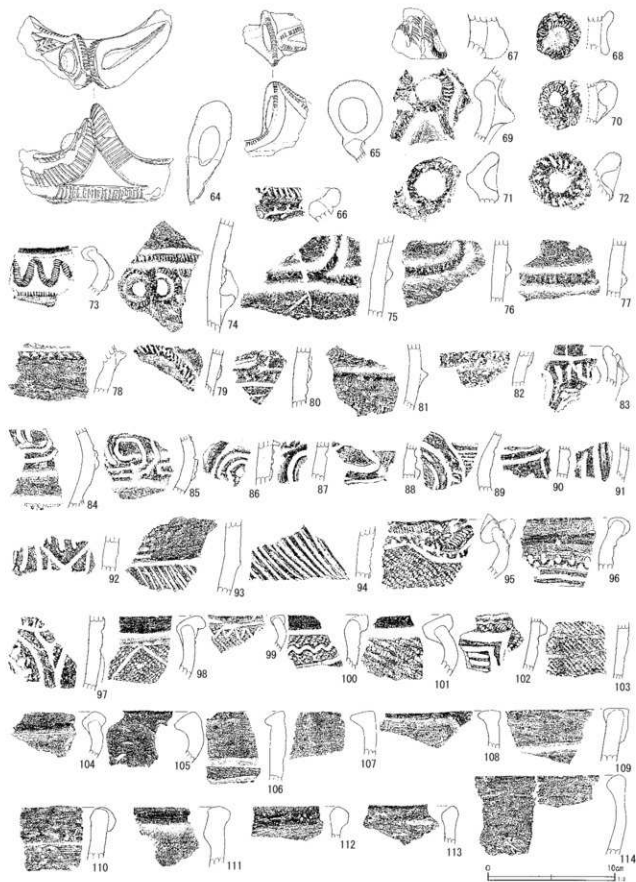
第44図64、65は突起である。64は山形に上部に大きく突き出した突起で、右側は空洞となる。左側は半球形の立体的装飾で加飾され、突起端部の隆帯には長い刻みが施される。65は左側に向かってラップ状に開く突起で、右側は欠損しているがすばまり口縁部に付くと考えられる。突起端部と上部に貼付された隆帯上に刻みを施す。



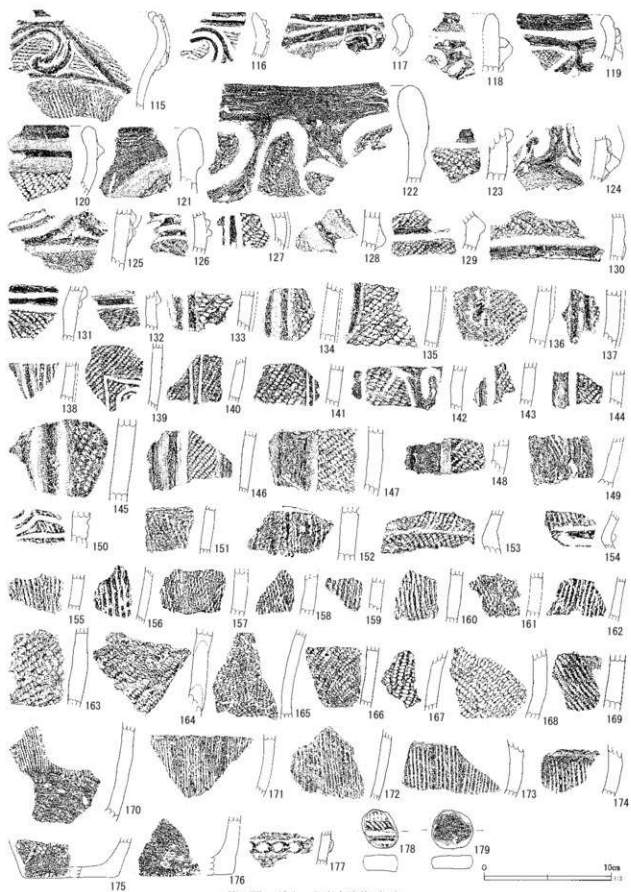
第42図 グリッド出土遺物 (1)



第43図 グリッド出土遺物(2)



第44図 グリッド出土遺物 (3)



第45図 グリッド出土遺物(4)

67～72、74は双眼状および円形の突起、装飾を持つ土器であり、すべて隆帯上に刻みを有する。67は双眼状突起で口縁部の加飾と考えられる。端部に刻みを持ち、両眼の間に沈線を施す。70も67に類似するが、両眼ではなく単眼構成である。68は円形装飾と考えられる。69、71、72は口縁部端部に付く円形突起であろう。69は円形突起から2本の隆帯が下方に延び、区画を構成すると考えられる。74は文様帯内に配された両眼状装飾で、両眼を構成する隆帯上に沈線を施し、文様効果を高めている。

66、73は口縁部の破片で、66は外へくの字に屈曲し、口唇部に刻みを配する。口縁部下には彫りの深い蓮華文を施す。73は大きく内湾し、口縁部文様帯には刻みの入った隆帯を波状に貼付する。

84～94は沈線でモチーフを描いている土器群である。84、85は同一個体で、頸部に無文帯を持つ土器である。低い隆帯を用いて文様帯間の区画としており、口縁部文様帯には2本沈線で渦巻文を描出している。84の下端部には、胴部文様帯の一部が見え、棒状工具による刺突が確認できる。86、88には一部隆帯が貼付されるが、87、89～92は沈線のみでモチーフを描いている。86、87、89は沈線による弧状の描出の一部が見えることから、84、85同様に渦巻文が表現されている可能性も考えられる。89の弧状沈線の脇には集合沈線を施文する。93、94は集合沈線を施文するもので、区画内施文と考えられる。

95～97は交互刺突を施す土器である。95は内湾する土器の破片で、口縁部は断面三角形を呈する。口縁部に貼付された刻みを有する隆帯は、中央部で巻き上がり、立体的に表現されている。その隆帯に沿って並行沈線が引かれ、その沈線上に細い竹管状工具で上下方向から交互に刺突を行っている。単節R Lの横位施文を地文とする。96は口縁部が外側に開く土器で、口縁部を肥厚させ、断面は丸みを帯びた方形を呈する。口縁部直下に竹管

状工具で上下方向から交互に刺突を行い、その刺突列の下部には3条の沈線を施文する。97は被熱のためか、裏面の剥離が著しく判然としないが、左側の隆帯上に単方向の刺突が確認できる。

98～103は縄文を施文する土器群である。98～101は口縁部の破片で、隆帯を貼付し口縁を方形に肥厚させており、98～100は口縁部文様帯に鋸歯状および波状の沈線を施文している。98は沈線で大きな鋸歯文を描く。地文は単節R Lの横位施文である。99は結節沈線で鋸歯文を描き、地文は単節R Lの横位施文である。100は沈線で波状文を描き、地文は単節R Lの横位施文である。101は0段多条の単節R Lの横位施文である。102は隆帯上に縄文を施文する土器で、単節R Lを横隆帯には横方向に、縦隆帯には縦方向に施文する。区画内には沈線文を施す。103は無節Rを縦位に施し、沈線を横位に2条施す。

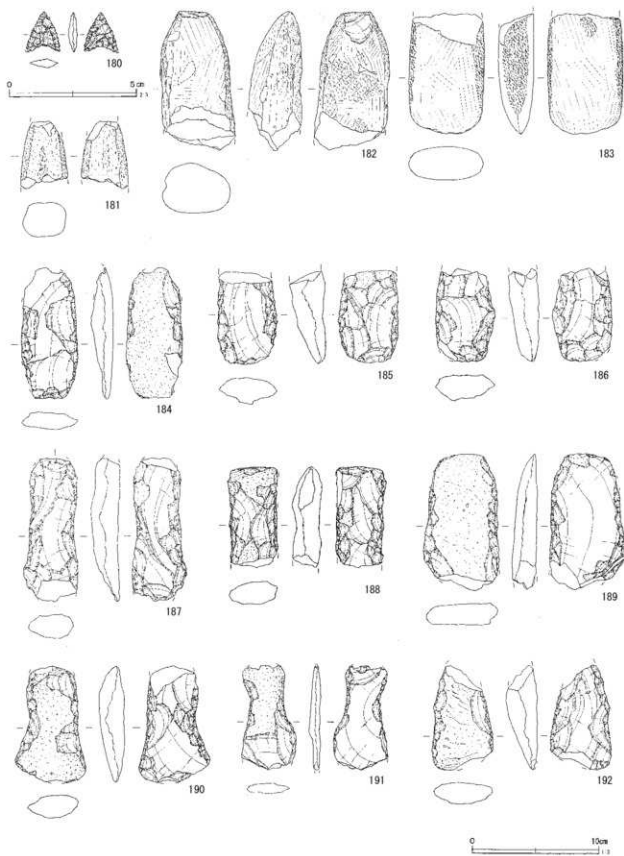
104～114は無文の口縁部破片で、口縁を断面、方形や三角、丸みを帯びた形状に肥厚させている。104、105は浅鉢の可能性が考えられるが、他は器形が直線的なため、浅鉢とはならないだろう。

第Ⅱ群土器（第44図83・第45図115～152・154）

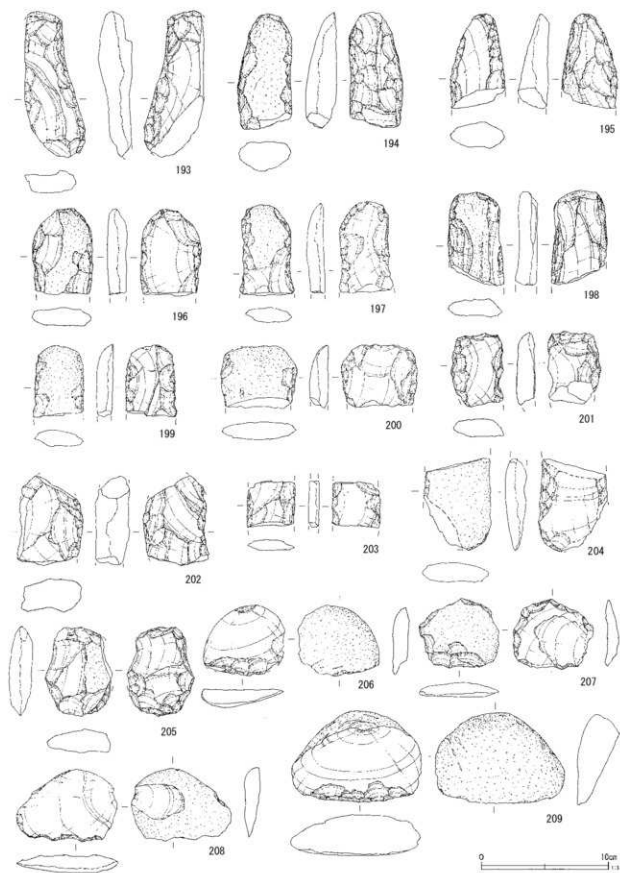
加曾利E式系の土器群を一括する。

第44図83、第45図115～123はキャリパー形土器の口縁部破片である。115、116は地文に撚糸文を施文する。119、120、123は楕円形区画内に縄文を施文し、119、120は単節R L、123は複節R L Rをそれぞれ横位に施す。121、122は口縁部文様帯が消失する加曾利EⅢ式の土器である。

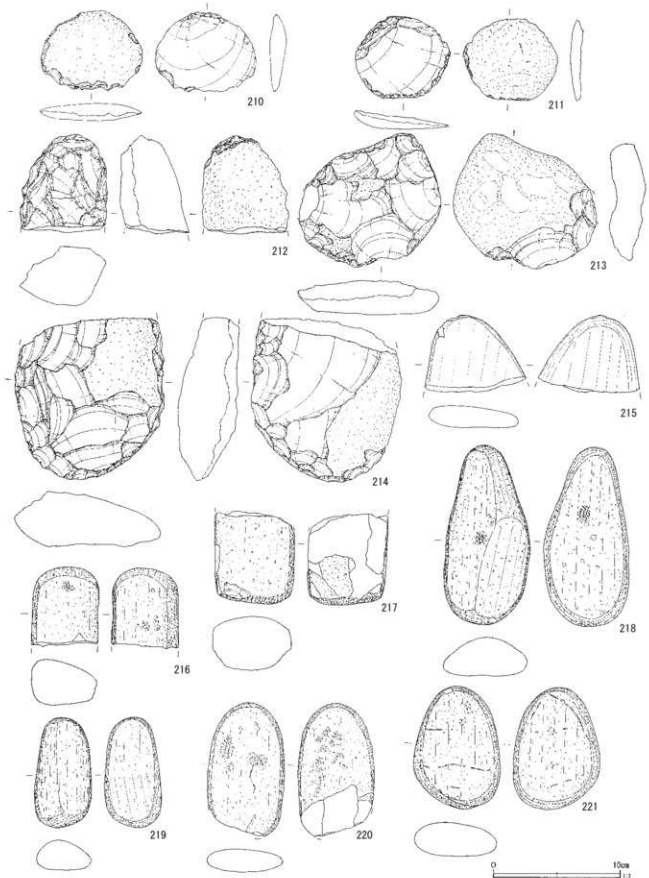
124～149は胴部破片である。124～126、129～132は口縁部文様帯の下部区画の隆帯で、127、128は口縁部文様帯内の区画隆帯と考えられる。126、130は単節R Lを横位に、127、129、131、132は単節R Lを縦位に、128は単節R Lを斜位に施文する。133～138、140～149は懸垂文を垂下する胴部破片である。133～135、138は隆帯による2本



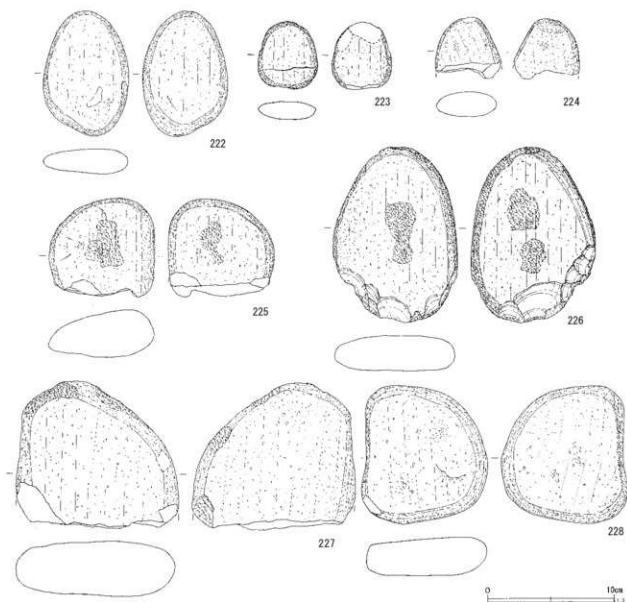
第46図 グリッド出土遺物(5)



第47図 グリッド出土遺物 (6)



第48図 グリッド出土遺物（7）



第49図 グリッド出土遺物(8)

懸垂文、136、137、149は隆帯の1本懸垂文である。140、141は並行沈線による懸垂文で、沈線間の磨り消しは行われていない。143～148は沈線間の磨り消しを行う磨消懸垂文である。139は縄文地に沈線でモチーフを描く。142は単節縄文を充填した波状文脇に上部がカーブした沈線を垂下させる。133～135は同一個体で、地文には0段多条の複節RLRを施文する。また、土器製作上の特徴として土器自体と隆帯の使用粘土を意図的に変えて、色調の違いを強調している。視覚的效果を狙ったものと考えられる。地文は、149が燃糸文

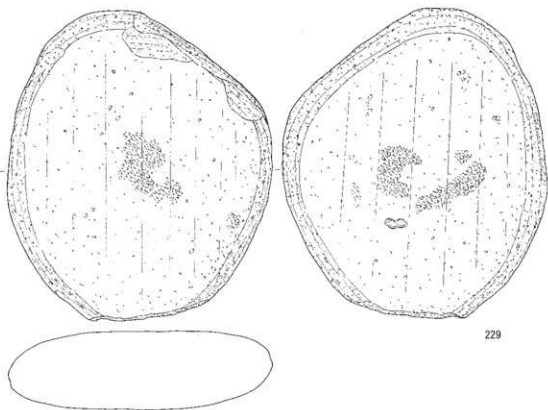
L、それ以外は単節RLを縦位に施文する。

150～152、154は連弧文系土器の破片である。

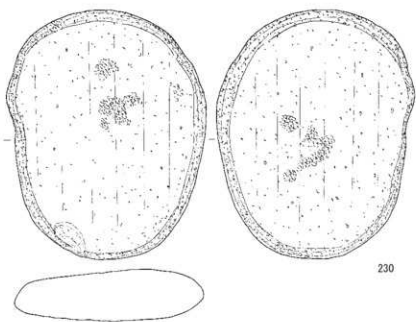
151、152は上端に沈線を施し、154は括れ部に横位隆帯を貼付する。地文はすべて燃糸文Lを施す。

153、155～174は地文のみの土器片である。155～162は燃糸文、153、163～169は単節縄文、170～174は条線文を施文する。燃糸文は159、161がR、それ以外はLである。163は前期黒浜式期の土器片でRL、LRの羽状構成をとる。

175、176は深鉢形土器の底部である。175は上端に単節RLの縦位施文が確認できる。



229



230



第50図 グリッド出土遺物(9)

Ⅲ群土器 (第45図177)

後期の土器である。177は堀之内Ⅱ式の土器で、横位隆帯上に指頭押捺痕が認められる。

(b) 土製品 (第45図178・179)

178、179は土製円盤で、178は隆帯上に刻みを持ち、その脇に沈線と爪形文を配した土器片を利用している。179は無文の土器片を利用している。

(c) 石器

石磯 (第46図180)

180は無茎石磯である。基部には浅い切りが入る。両側縁部はやや外湾する。

磨製石斧 (第46図181～183)

181～183は磨製石斧である。181、182は刃部を欠損する。181は残存部から、定角式であると考えられる。182は不定形なもので、裏面や側縁部には敲打痕が残存している。未製品で破損したものと考えられる。表面や破損面が被熱のため赤化している。183は基部が欠損するものである。刃部は丁寧に作りだされている。両側縁部には敲打痕が残存し、研磨は施されていない。

打製石斧 (第46図184～192・第47図193～204)

184～204は打製石斧である。グリッドからは多くの打製石斧が検出されたが、完形品は出土しなかった。184～188は、側縁部と刃部の幅があまり変わらない、いわゆる短冊形に近いものである。188は刃部を欠損するが、残存部からここに含めた。184は裏面に自然面を大きく残している。189～193は刃部に最大幅を持つものである。189～192は、表裏面いずれかに大きく自然面が残存している。194～202は、刃部を欠損するものだが、そのほとんどが刃部に最大幅を持つものと考えられる。203、204は基部、刃部ともに破損するものである。

スクレイパー (第47図205～209・第48図210～211)

205は打製石斧の基部欠損後に再加工を施したものと考えられる。

206～211は剥片の縁辺部に粗く加工を施し、刃部として使用したもので、剥片の形状がそのまま残存している。

礫器 (第48図212～214)

212～214は礫器である。212は刃部を欠損するもので、裏面に大きく自然面が残存している。213は扁平な自然礫を加工したもので、刃部は鋭く作り出されている。214は大型のもので、表裏面に自然面を残している。基部は欠損している。

砥石 (第48図215)

半分を欠損する。残存部の表裏面は平坦で、溝跡は認められない。

磨石 (第48図216～221・第49図222～228)

216～228は磨石である。

216、217は棒状に近いもので、敲石の可能性が高い。特に217は下端面の敲打が顕著である。しかしながら表裏面は滑らかで、磨石としても使用されたと考えられ、一括してここに含めた。

218、219は横断面が三角形となるもので、各面を磨面として使用している。218の表裏面の中央付近には、敲打痕が認められる。220～226は扁平な楕円形状のものである。220～224は器面全体を磨面とし、表裏面や、側縁の一部に敲打痕が認められる。225は表裏面の中央に敲打による浅い凹部が認められる。226は側縁に敲打が顕著に加えられ、縁辺には敲打による剥離が認められる。表裏面の中央には、敲打による浅い凹部が認められる。227、228は不定形なもので、表裏面に平坦面を持っている。側縁や表裏面の一部に敲打痕が認められる。

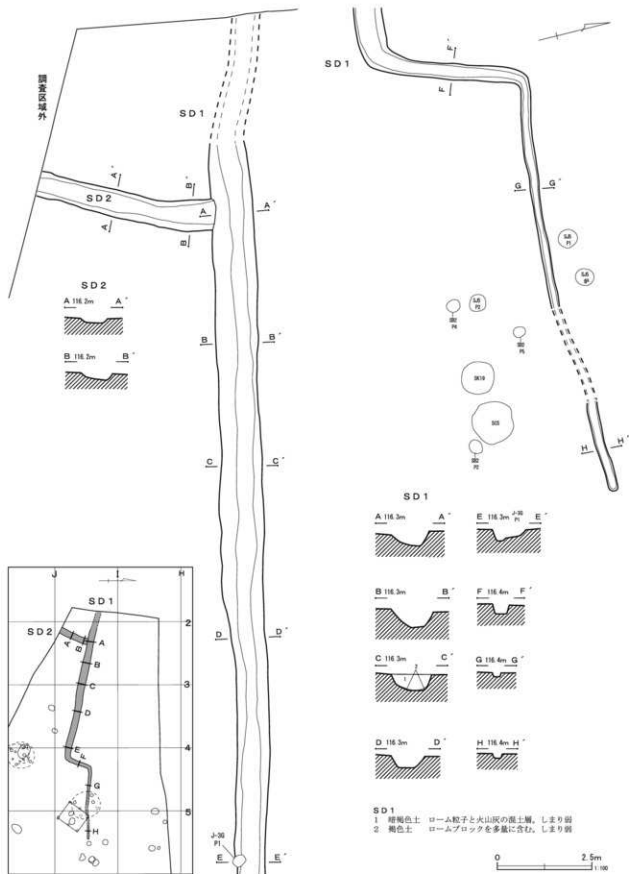
石皿 (第50図229・230)

229、230は石皿である。扁平な大型の自然礫を使用するものである。表裏面の中央には敲打痕が残存している。229は上端と下端の一部を破損するが、破損後も使用している。

第11表 石器一覧表

図版	番号	出土位置	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
9	29	SJ1	楔形石器	黒曜石	1.6	0.9	0.6	0.6	
9	30	SJ1	楔形石器	黒曜石	2.4	2.0	0.7	2.4	
9	31	SJ1	打製石斧	結晶片岩	7.2	5.6	2.4	132.3	
9	32	SJ1	打製石斧	砂岩	7.3	4.6	2.1	100.1	
9	33	SJ1	打製石斧	砂岩	4.6	6.0	3.1	95.7	
9	34	SJ1	スクレイパー	頁岩	5.1	7.0	1.4	40.0	
9	35	SJ1	磨石	閃緑岩	6.8	8.9	4.1	348.0	
9	36	SJ1	磨石	砂岩	8.2	3.9	1.8	84.5	
9	37	SJ1	磨石	砂岩	9.9	6.9	5.4	325.5	
9	38	SJ1	磨石	砂岩	4.2	6.6	5.0	133.2	
21	6	SC1	砥石	砂岩	10.5	9.1	5.5	613.1	
21	7	SC1	石皿	安山岩	10.6	7.6	7.1	462.9	
21	8	SC1	磨石	安山岩	5.8	10.5	9.1	589.8	
21	9	SC1	石皿	砂岩	13.0	12.9	6.2	1088.0	
21	10	SC1	石皿	砂岩	24.9	15.6	7.7	3420.2	
21	11	SC1	石皿	安山岩	15.0	19.8	8.9	3406.6	
21	12	SC1	石皿	砂岩	17.8	17.1	8.1	2815.1	
27	8	SC4	磨石	安山岩	13.0	10.6	6.0	995.4	
27	9	SC4	石皿	砂岩	10.4	11.3	5.1	624.8	
27	10	SC4	石皿	閃緑岩	15.3	14.7	5.5	1463.4	
29	25	SC5	打製石斧	砂岩	8.8	3.4	2.4	81.0	
29	26	SC5	磨石	閃緑岩	13.5	8.0	3.8	414.3	
29	27	SC5	磨石	砂岩	7.9	8.1	8.0	569.1	
29	28	SC5	磨石	閃緑岩	5.6	5.5	5.9	208.3	
32	3	SK2	磨石	砂岩	16.2	5.1	5.4	477.7	
36	2	SK1	打製石斧	ホルンフェルス	17.9	10.9	7.5	1457.3	
36	3	SK2	磨石	砂岩	18.4	10.4	8.9	1531.0	
36	10	SK10	打製石斧	ホルンフェルス	6.9	7.1	2.2	102.6	
36	17	SK11	打製石斧	ホルンフェルス	5.6	5.3	2.8	77.2	
36	19	SK14	打製石斧	砂岩	5.3	5.1	2.0	54.9	
38	43	SK6	剥片	黒曜石	1.4	1.3	0.3	0.5	
38	44	SK6	剥片	黒曜石	1.7	1.7	0.4	0.9	
38	45	SK6	打製石斧	緑色岩	15.0	7.0	3.3	378.5	
38	46	SK6	打製石斧	結晶片岩	9.2	3.6	1.6	61.2	
38	47	SK6	打製石斧	砂岩	5.9	3.8	1.5	40.5	
38	48	SK6	打製石斧	ホルンフェルス	4.8	6.2	2.4	71.9	
38	49	SK6	磨石	砂岩	5.9	6.5	3.1	118.1	
38	50	SK6	石皿	絹雲母片岩	11.7	8.6	1.6	190.4	
39	41	SK12	打製石斧	ホルンフェルス	7.1	4.7	1.3	54.0	
39	42	SK12	砥石	緑色片岩	14.5	3.7	2.0	175.7	
40	1	SK13	剥片	黒曜石	2.8	2.6	0.6	2.1	
40	2	SK13	石皿	安山岩	23.5	22.0	6.9	3852.4	
40	3	SK13	石皿	砂岩	25.9	22.0	8.7	6073.6	
41	1	SK16	砥石	緑泥片岩	17.4	3.8	1.7	161.9	
41	2	SK16	磨石	閃緑岩	6.4	9.9	3.3	262.4	
41	17	SK17・18	打製石斧	ホルンフェルス	5.3	6.1	1.5	48.0	
41	18	SK17	磨石	閃緑岩	8.9	8.1	4.4	471.9	
46	180	J-5G	石鏃	黒曜石	1.6	1.4	0.3	0.4	
46	181	J-6G	磨製石斧	緑色岩	5.3	3.7	3.1	87.1	

図版	番号	出土位置	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
46	182	I-6G	磨製石斧	砂岩	11.0	5.9	4.2	327.5	
46	183	E-3G	磨製石斧	緑泥片岩?	9.6	6.0	2.8	292.8	
46	184	E-3G	打製石斧	砂岩	10.4	4.5	1.7	79.8	
46	185	J-6G	打製石斧	砂岩	7.4	4.8	2.8	102.4	
46	186	I-6G	打製石斧	砂岩	7.4	4.7	2.4	97.6	
46	187	風例木痕	打製石斧	ホルンフェルス	11.3	4.3	2.3	123.3	
46	188	H-6G	打製石斧	砂岩	7.9	4.0	2.4	95.6	
46	189	E-3G	打製石斧	ホルンフェルス	10.8	6.0	2.0	180.1	
46	190	I-6G	打製石斧	砂岩	9.2	5.6	2.0	102.2	
46	191	H-4G	打製石斧	ホルンフェルス	8.3	4.3	0.9	34.7	
46	192	E-2G	打製石斧	ホルンフェルス	8.3	4.8	2.5	89.7	
47	193	H-4G	打製石斧	ホルンフェルス	11.6	4.7	2.7	126.3	
47	194	D-3G	打製石斧	ホルンフェルス	9.1	4.2	2.5	123.7	
47	195	D-3G	打製石斧	砂岩	7.5	4.5	2.4	77.3	
47	196	D-3G	打製石斧	ホルンフェルス	6.9	4.8	1.6	77.0	
47	197	J-5G	打製石斧	ホルンフェルス	7.2	4.3	1.5	56.5	
47	198	J-5G	打製石斧	緑泥片岩	7.4	4.4	1.7	81.6	
47	199	H-3G	打製石斧	ホルンフェルス	5.7	4.0	1.3	42.1	
47	200	E-3G	打製石斧	ホルンフェルス	5.0	6.0	1.5	60.9	
47	201	E-2G	打製石斧	ホルンフェルス	5.8	4.2	1.5	46.9	
47	202	H-6G	打製石斧	ホルンフェルス	7.1	5.2	2.7	129.3	
47	203	I-6G	打製石斧	ホルンフェルス	3.7	3.8	0.9	19.1	
47	204	J-6G	打製石斧	砂岩	7.3	5.4	1.7	76.4	
47	205	I-6G	スクレイパー	ホルンフェルス	7.1	5.3	1.9	79.7	
47	206	グリッド一括	スクレイパー	砂岩	5.6	6.4	1.5	57.0	
47	207	E-2G	スクレイパー	頁岩	5.6	6.3	1.1	39.6	
47	208	E-3G	スクレイパー	ホルンフェルス	5.8	7.9	1.4	62.8	
47	209	グリッド一括	スクレイパー	砂岩	7.2	10.2	3.2	225.0	
48	210	D-3G	スクレイパー	ホルンフェルス	6.3	8.0	1.4	83.3	
48	211	J-4G	スクレイパー	ホルンフェルス	6.5	7.4	1.4	55.7	
48	212	グリッド一括	礫器	ホルンフェルス	7.8	6.8	5.4	312.5	
48	213	E-2G	礫器	砂岩	10.6	11.2	2.7	306.8	
48	214	I-4G表採	礫器	ホルンフェルス	12.9	11.8	4.7	815.3	
48	215	D-3G	砥石	砂岩	6.1	7.9	1.9	107.2	
48	216	風例木痕	磨石	砂岩	6.3	5.3	3.6	193.8	
48	217	風例木痕	磨石	安山岩	7.3	6.3	4.3	325.5	
48	218	I-6G	磨石	安山岩	14.2	6.8	3.2	398.8	
48	219	E-3G	磨石	砂岩	8.7	4.5	2.5	132.1	
48	220	K-6G	磨石	砂岩	10.4	6.1	1.9	170.4	
48	221	グリッド一括	磨石	砂岩	9.7	6.8	2.9	267.2	
49	222	H-5G	磨石	砂岩	9.8	6.7	2.1	190.2	
49	223	J-5G	磨石	砂岩	5.4	4.7	1.5	51.4	
49	224	I-6G	磨石	砂岩	5.2	4.8	2.0	59.3	
49	225	H-3G	磨石	砂岩	7.8	8.3	3.8	338.7	
49	226	E-3G	磨石	閃緑岩	13.9	9.8	2.9	581.5	
49	227	I-6G	磨石	安山岩	11.7	12.8	4.4	1033.4	
49	228	I-6G	磨石	閃緑岩	10.9	10.0	3.8	543.2	
50	229	I-5G	石皿	閃緑岩	32.7	28.1	8.7	11680.0	
50	230	I-6G	石皿	閃緑岩	26.3	21.1	5.5	4533.2	



第51図 第1・2号溝跡

2. 近世

(1) 溝跡

第1号溝跡 (第51図)

A区のI-1～5グリッドに位置する。A区の中央付近から、等高線に直交するように概ね東西方向に走り、途中クランク状に屈曲する。西側は攪乱により不明だが、調査区域外へと伸びていると思われる。東側はクランク状に屈曲する部分から徐々に浅くなり、第3号集石土城の西側で途切れてしまう。I-4・5グリッドで第2号溝跡、第5号住居跡、第2号掘立柱建物跡と重複している。調査区域内の全長は39.35m、幅は最大1.2m、最小0.25m、深さは最大0.45m、最小0.10mを測る。本遺構の所属時期は、出土遺物などから18世紀頃と推定される。

第1号溝跡出土遺物 (第52図)

1は肥前系の碗の底部片である。壘付以外に透

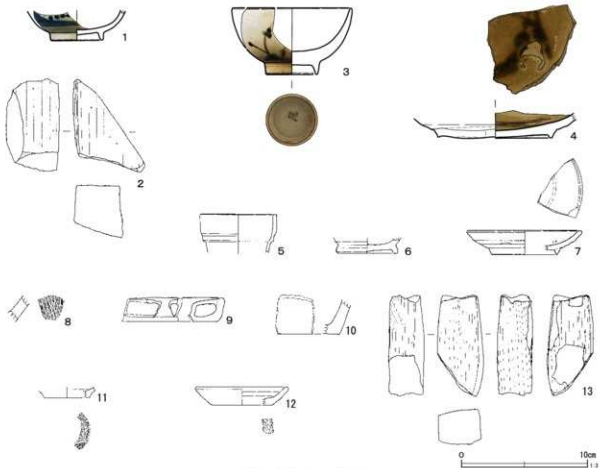
明釉が施されている。壘付が僅かながら赤味を帯びているのは、鉄葉のためと考えられる。また高台内には、胎土の粒子が付着している。

第2号溝跡 (第51図)

A区のI-1・2グリッドに位置する。第1号溝跡と重複しているが、第1号溝の反対側には伸びていないことから、2条の溝は一連のものと考えられる。調査区内の全長は4.75m、幅は最大0.85m、最小0.60m、深さは0.10～0.20mである。

(2) グリッド出土遺物

2は砂岩製の砥石である。第5号集石土城からの出土であるが、流れ込みと考えられる。3は肥前系の碗の破片である。壘付以外に透明釉が施されている。また、壘付には砂粒が付着している。4は瀬戸・美濃系の皿の破片である。見込み～高台脇近くまで灰釉が施されているが、高台や高台



第52図 近世の出土遺物

内にも部分的に灰軸が認められる。見込みには、銅緑軸の流し掛けが行われている。施軸範囲内には、細かな貫入が多数認められる。また、見込みには焼成の際のトチ跡がみられる。この他にも畳付から高台内にかけての部分に、1箇所トチ跡が存在している。このトチ跡部分と高台には歪みがあり水平ではなくなっているが、トチ跡部分とその周囲は窪み、その他では高台・高台内が垂れている。この状態は、焼成時に重ね積みを行った際に上の製品の加重で「へたった」結果と考えられる。5、6はわずかな破片であるため器種の特定はできないが、5は壺、6は壺もしくは鉢の可能性が

考えられる。また、6は第1号集石土壌からの出土であるが、流れ込みと思われる。7は瀬戸・美濃系の皿の破片である。見込みへ胴部上半に、灰軸が施されている。焼成時に、見込みに重ね積みされた製品の高台跡が認められる。欠け口は比較的鮮明である。8は瀬戸・美濃系の播鉢の破片である。内外面ともに鉄軸が施されており、遺存部分の、卸目の磨滅は少ない。欠け口は比較的鮮明である。9は焙烙の破片である。10の器種は不明であるが内外面に煤が付着していることから、焙烙または土鍋の可能性が考えられる。11、12はかわらけ、12は凝灰岩製の砥石の破片である。

第12表 近世の遺物観察表

番号	遺構名	種別	機種	産地	残存率	口径	底径	器高	胎土	焼成	釉薬装飾	成型技法	器種・器形の特徴	文様	出土位置・備考	図版
1	S D 1	磁器	碗	肥前	50	—	3.9	(2.4)	灰白 緻密	良好	畳付け 透明釉	轆轤	胴部外面：呉須筆 描き		18世紀 中～後半	22-3
2	S C 5	石製品	砥石			長さ7.3cm 幅5.8cm 厚さ4.2cm 重さ150.3g 砂岩										
3	A 区 表 採	磁器	碗	肥前	30	(9.3)	3.9	5.3	灰白 緻密	良好	畳付け 透明釉	轆轤	胴部外面：草花文 高台脇：一重園線 高台際：二重園線 高台内：銘		18世紀 中～後半	22-4
4	I 5 G	陶器	皿	瀬戸 美濃	30	—	高台径 (13.4)	(2.8)	灰白 緻密	良好	灰釉	轆轤	削り出し 高台		18世紀 か	22-5
5	D 3 G	陶器	壺 か？		10	(9.0)	—	(4.6)	明焼	良好		轆轤			近代か	22-6
6	S C 1	陶器	壺か 鉢	瀬戸 美濃	15	(13.2)	高台径 (7.5)	2.9	浅黄	普通	灰軸	轆轤	貼り付 け高台 か		18世紀 か	22-7
7	E 3 G	陶器	皿	瀬戸 美濃	15	(13.2)	高台径 (7.5)	2.9	浅黄	普通	灰軸	轆轤	貼り付 け高台		17世紀 後半か	22-11
8	J 4 G	陶器	播鉢	瀬戸 美濃	5	—	—	(3.2)	陶灰	普通	鉄軸	轆轤				22-8
9	J 4 G	土器	焙烙		5	—	—	2.8	陶灰	普通		轆轤			19世紀	22-10
10	S C 5	土器	焙烙 か 土鍋		5	—	—	4.1	陶灰	普通		轆轤			近世	22-9
11	K 6 G	かわ らけ	皿		20	—	(5.3)	(2.2)	鈍い 橙	普通		轆轤	底部： 回転糸 切り			22-12
12	J 6 G	かわ らけ	皿		10	(10.3)	(7.0)	2.1	浅黄	普通		轆轤	底部： 回転糸 切り			22-13
13	D 3 G	石製品	砥石			長さ8.0cm 幅2.9cm 厚さ2.8cm 重さ121.4g 凝灰岩										

V 調査のまとめ

1. 縄文時代中期中葉の集落

今回の第10次調査では、縄文時代中期中葉勝坂式終末期から加曽利E式前葉の住居跡6軒と土壌が検出された。第III章でも述べたが、むじな塚遺跡ではこれまでに9次にわたる調査が実施されており、縄文時代前期から近世にわたる複合遺跡であることが確認されている。その中で縄文時代中期中葉の遺構は、5次調査区を中心に8、9次調査区で検出され、遺跡の西部に広がっていると予想された。今回の10次調査区でも該期の遺構が散漫ではあるが検出され、縄文時代中期中葉の集落は遺跡西端部に占地して形成されていたことが確認できた。第3区における2、3次調査区と8、6次調査区の間で明確ではないが、わずかな地形の落ち込みを確認することができ、そのラインの西側が集落の範囲として想定されるのではないだろうか。

ここではこれまでの調査成果を踏まえ、むじな塚遺跡の縄文時代中期中葉の集落変遷を考えたい。

第53図には縄文時代中期中葉の遺構配置を掲載した。5、8、9、10次調査区で当該期の遺構を検出した部分を包括する東西約150m、南北約100mを集落の範囲として想定した。

10次調査区のA区中央部、帯状の網掛部分は、昭和53年に町教育委員会により確認調査が行われ、土壌から大形深鉢が1点検出された。口縁部に大形三角状突起を持つ横帯区画構成の土器で、文様要素から藤内I式段階の所産であり、「縄文中期土器群の再編」（谷井他1982）（以下、埼玉編年と呼称する）のVI期1群土器に相当すると考えられる。同時期に第9次調査のS J 1があげられる。隆帯脇に幅広い角押文、蓮華文を施し、隆帯で三角形区画を構成する深鉢形土器が出土している。当該期の明確な遺構はこれらの住居跡と土壌のみであり、むじな塚遺跡の集落の開始期と考えられる。

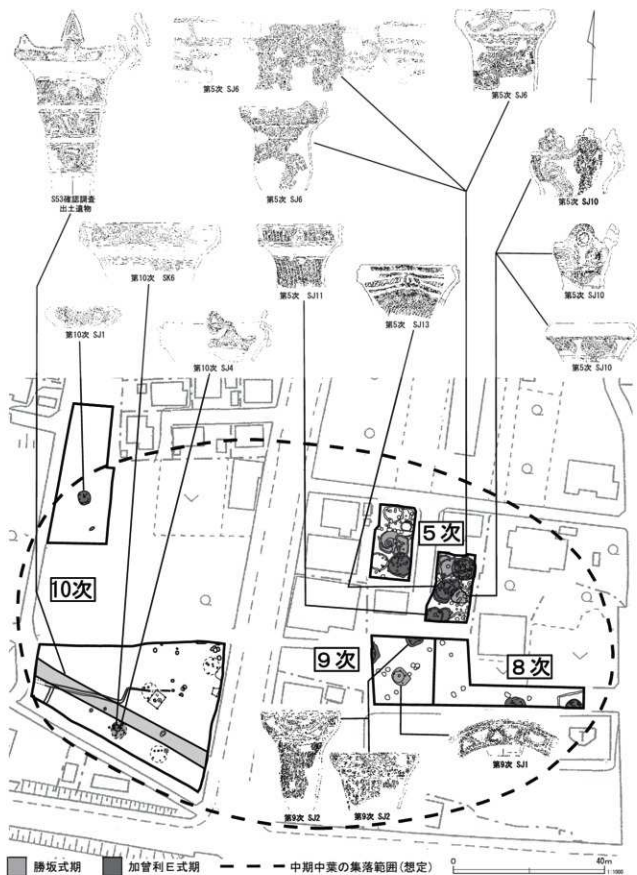
次段階として、第5次調査のS J 10があげられる。口縁部に大形双環状突起を付し、隆帯脇に沈線、爪形文、蓮華文を配する深鉢形土器や頸部楕円区画文土器などが出土しており、藤内式新段階～井戸尻I式期にかけてで、埼玉編年のVII期にあたる。

次に勝坂式終末期として、第10次調査のS J 4があげられる。わずかな破片のみであるが、口縁部を三角形区画し、三角状突起を持つキャリパー形の深鉢形土器が出土している。井戸尻I式にまで遡る可能性も考えられるが、ここでは勝坂式最終期のVIII期として捉えておきたい。

次段階は加曽利E I式最古段階として捉えられる第5次調査のS J 6である。この住居跡は3回の建替えが行われており、大量の土器が出土している。そのため出土土器の様相はやや幅を持っているが、今回は古い様相の土器を抽出した。口縁部から胴部下半まで遺存している2個体の土器は口縁部文様帯に剣先状S字文やクランク文先端に渦巻文を配した文様を採用している。頸部には波状文、胴部は大木8a式の文様要素を取り入れた構成をとる。また、第10次調査のS J 1もこの段階と考えられる。前述のS J 6とは様相を異とするが、隆帯上の刻みや交互刺突などは勝坂式の文様要素を取り入れた結果と考えられる。

次は第9次調査のS J 2があげられる。キャリパー形で口縁部文様帯は弧状区画され端部に渦巻文が付く。頸部は区画されるものもあるが無文帯とはならない。加曽利E I式新段階と考えられる。

次は明確な頸部無文帯が形成され、口縁部文様帯も渦巻文と楕円形・方形区画で構成される段階である。第5次調査のS J 11、13、第10次調査のS K 6があげられる。加曽利E II式古段階と考えられる。

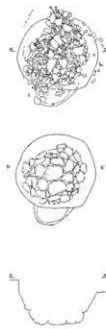


第53図 第10次調査区周辺遺構配置図

むじな塚遺跡第5次 SC06



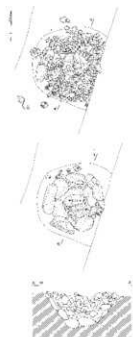
中小前田2遺跡 SC2



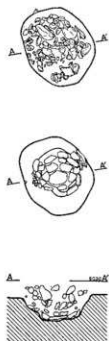
中小前田2遺跡 SC3



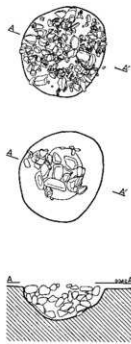
宮沢遺跡 SC1



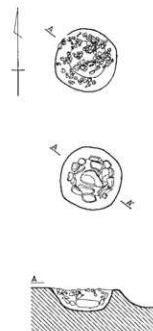
北塚屋 SC7



北塚屋 SC8



北塚屋 SC31



古井戸遺跡 SC29



第54図 埼玉県北西部の集石土壌

以上、むじな塚遺跡のこれまでの調査成果における中期中葉の時期特定可能な遺構を中心にみてきた。その結果、勝坂式中葉の藤内Ⅰ段階から加曾利EⅡ式古段階までの縄文時代中期中葉の集落

であることが確認できた。しかし、今回は時期ごとにおける集落の占地の変遷には明確な規則性を見出すことはできなかったため、今後の周辺調査による資料の増加に期待したい。

2. 集石土壌について

今回の10次調査区から集石土壌は5基検出された。過去の調査においても、第1～3次調査で3基、第5次調査で6基確認されており、これまでむじな塚遺跡で検出された集石土壌は合計14基を数える。土器が出土しない場合も多く時期を決定するのは難しいが、周囲の検出遺構などから推察すると、縄文時代中期と考えてよいだろう。

今回検出された集石土壌の中で遺存状態の良好であった第5号集石土壌についてふれたい。

第5号集石土壌は、若干の歪みはあるがほぼ円形を呈しており、長径1.11m×短径1.06m×深さ0.48mを測る。出土遺物から、加曾利EⅠ式古段階と考えられる。遺構確認時には、焼礫や土器片が周囲約2.0～2.4mの範囲で集中して検出された。遺物がかなり広範囲に広がっていたため、当初は住居跡の可能性も考えたが、掘り下げていくと土壌状となり、覆土には拳大以上のやや大きなものを含む礫が混入していた。底面には扁平な礫を囲むように大形礫が設置されており、いずれも焼成により赤化していた。土壌壁面の一部にも焼土化した部分が確認された。

検出された礫のうち取り上げたものは288点で、総重量17,746kgである。石材の点数の内訳は、チャートが55% (158点)、砂岩が36% (105点)、ホルンフェルスが4% (11点)、玉髄が3% (9点)、安山岩が2% (5点)であった。遺跡の北側を流れる荒川から石材を入手したと考えられる。礫の大きさは10cm以下が多く、3～8cmのものが主体となる。また、完形礫はわずかに4点のみで、実に99%が破碎されていた。そのうち、95%にあたる273点に被熱によるとみられる赤化、割れが確認でき

た。破碎された礫の出土率が極めて高いのは、大形礫を砕いて使用した結果とも考えられるが、多くは被熱により自然破碎した結果と捉えられよう。

集石土壌自体は、縄文時代を通じて各地に存在している遺構であるが、その様相は一様ではなく、地域差や時期差が顕著である。特に関東地方の早期前葉と中期、九州地方の早期に盛行したことが知られている。また、その性格や機能は、集石土壌が多様な形態を持つことから、調理施設、祭祀施設、墓塚、土器焼成施設など様々な見解が示されてきた。最近では集成的研究が進み、さらに民俗例などから、日常的な石蒸調理用の「屋外調理施設」とする説と、それに批判的な見解が両立している。

今回検出された5基の集石土壌のうち、第2号集石土壌を除く4基は、底面に礫を敷き詰めた状態で検出され、特に第1、5号集石土壌の境内からは多量の礫が出土した。このような在り方は、従来より「屋外調理施設」としての機能が推定されている。中村倉司氏は「礫群と集石土壌」の中で、「集石土壌は、土壌と焼石によって構成され、その用途は蒸し焼き調理施設である」とし、礫が充填されているものを「密集型」、散在しているものを「散在型」の二者に分類している。そして、「密集型」は再利用のための待機の状態を、「散在型」は廃棄（遺棄）の状態を示したものとしている（中村2001）。このことから、第1、5号集石土壌は再利用を意識した「密集型」と考えられる。

近年各地で、底面に大形礫を敷き詰めた集石土壌の検出が多数報告されている。第54図には埼玉県北西部地域で検出された類型の一部を掲載し

た。このような形態の集石土壌には時期差や地域差が認められないことから、使用状況に起因したものと考えられる。中村氏は集石土壌での石蒸し調理の復元実験を通して、礫の焼成方法を試案している。礫と燃料の位置関係から、礫を下に置いてその上で燃焼させる礫下焼石法とその逆の礫上焼石法を提示し、底面に置き石が行われている場合は焼成前に礫を設置していることから礫下焼石法が選択されたことを示唆している。実験結果から、礫上、礫下の何れの方法でも礫の加熱、調理ともに支障はないということである。底面に礫を

敷き詰めた状態で今回検出された4基の集石土壌は「礫下焼石法」がとられたと考えられる。また、中村氏の実験によると、礫を域内で加熱する際、除湿のため予め土壌の空焚きをかなりの時間費やして行うということである。礫下焼石法は、除湿にかかる時間と燃料を効率的に使用できた可能性も指摘できる。

集石土壌については、調理施設であることから集落内における住居跡との密接な関係が考えられるが、集石土壌の時期決定の困難さから直接の関連性は明確にはできなかった。

引用・参考文献

- 石塚三夫 1995『町内遺跡3』寄居町調査報告第14集 寄居町教育委員会
- 石塚三夫 1998『むじな塚遺跡(第5次調査)』寄居町遺跡調査会報告第16集 寄居町遺跡調査会
- 磯崎 一 2006『堀米遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第330集
- 井上尚明 1996『むじな塚遺跡(第4次調査)』寄居町遺跡調査会報告第10集 寄居町遺跡調査会
- 井上 肇・石塚三夫 1994『町内遺跡1』寄居町遺跡調査報告第12集 寄居町教育委員会
- 今関久夫 1990『むじな塚遺跡群』寄居町文化財調査報告第8集 寄居町教育委員会
- 上田典男 1983『縄文時代焼礫集積遺構の形態的把握』『物質文化』41
- 金子直行 2001『まます遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第242集
- 小林 高 2006『中小前田2遺跡(第3次、第6次、第8次)』寄居町遺跡調査会報告第28集 寄居町遺跡調査会
- 鈴木敏昭・黒坂禎二 1985『北塚屋(II)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第48集
- 関 義則 2003『むじな塚遺跡(第6次調査)』寄居町遺跡調査会報告第24集 寄居町遺跡調査会
- 関 義則 2004『東原遺跡』寄居町遺跡調査会報告第27集 寄居町遺跡調査会
- 谷井 彪他 1982『縄文中期土器群の再編』埼玉県埋蔵文化財調査事業団紀要1982
- 谷井 彪・細田 勝 1997「水産遺跡の研究—加曾利E式土器の編年と曾利式の関係からみた地域性—」埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要第13号
- 谷口康浩 1986『縄文時代「集石遺構」に関する試論—関東・中部地方における早・前・中期の焼礫集積遺構を中心として—』『東京考古』4
- 中村倉司 2001『礫群と集石土壌—蒸焼調理法の意義—』『埼玉考古』第36号
- 細田 勝・岩田明広 1994『樋ノ下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第135集
- 宮井英一 1989『古井戸—縄文時代—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第75集
- 宮井英一・上野真由美 2005『宮沢遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第308集
- 宮井英一 2009『銭小田遺跡/伝田不動寺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第359集
- 宮崎朝雄 1982『増善寺遺跡』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第5集
- 寄居町教育委員会町史編さん室 1984『寄居町史 原始古代中世資料編』寄居町教育委員会
- 寄居町教育委員会町史編さん室 1986『寄居町史 通史編』寄居町教育委員会
- 若松良一・細田 勝 2001『箱石遺跡II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第267集